
やってられないけどやらなきゃならない人生

那須叫喚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やってられないけどやらなきゃならない人生

【Nコード】

N0288F

【作者名】

那須叫喚

【あらすじ】

無駄に頭が良く、無駄に運動神経の良い主人公のやってられないけどやらなきゃならない人生です。毎週月曜日に更新していく予定です。

第1章：俺が桜聖！？（前書き）

懲りずにまた学園物、しかも高校生活を書く馬鹿な作者ですが、読んでくれたら嬉しいです！

『僕の高校生活！！』も同時に更新していく予定ですので、よければあちらも読んで下さい。

第1章：俺が桜聖！？

「翔ちゃん、明日から桜聖に通いなさい。」

「……は？」

「だから、翔ちゃんは明日からこの桜聖学院に通うのよ。」

「はあああ！！！？？」

「うるさいわね。何よ。」

うるさいって……。母さんが意味不明なことを言うからだろ！

「叫ぶのは当たり前だろ！！　なんで桜聖なんだよ！！　俺はちゃんと、盟聖を受かっただろ！！」

盟聖とは盟聖学院と言って、世界でもトップクラスの共学校である。

「知ってるわよ。あれは私のコネを使って取り消しにして、桜聖に変えて貰ったわ。」

「何『友達に本を貸してもらおうよう頼んだの』みたいなノリで言うてんだよ！！」

「私にとってはそんな感じなのよ。」

「はあ。まあそれは分かった。だが、なんで通うのが桜聖なんだよ！！」

桜聖とは桜聖学院と言って、盟聖の姉妹校であり『女』学院である。

「何が不満なのよ。 あそこは盟聖の姉妹校じゃない。 それに、翔ちゃんならどっちに通ってもトップには変わらないじゃない。」

「俺は成績のことを言ってるんじゃない！ 俺は『男』で桜聖は『女』学院じゃないか！！ どうやって通うんだよ！！」

そう、さっきから叫んでるのは桐生翔きりゅうしょうと言う『男』である。

「そんなの女装したら良いだけじゃない。 幸い翔ちゃんは髪は長くて綺麗で、顔をも女顔だし、ムダ毛とかも全くないし♪」

そんなムチャを言うのは人は、桐生沙璃きりゅうさりと言って、翔の母親である。

「くっ！ 髪以外は認めるけど……。 髪は母さんが切るなって言うから置いといて、たまに母さんに切って貰ったんだろ。 はっ！ まさか……。」

「そう、そのまさか。 翔ちゃんはきっと綺麗な子になると思ったから、髪は私が手入れしてたの。」

「じゃあ桜聖に入学させるのも……。」

「ええ。 小学校の頃から無駄に頭良かったから、高校は絶対桜聖に通わせようと思ってたの♪」

まさか小学校の時から計画だったとは……。 なんか計画通りにいったみたいで腹が立つな。

「だけどすぐバレるだろ。見た目でバレないとしてもだ（それだけで男としてはかなり悔しい）仕草や言葉づかいでバレるだろ。」

「忘れた？ 私は昔から翔ちゃんに、礼儀作法はしっかり教えてきたでしょ。」

そ、そういえば教わったような……。だ、だが！！

「仕草はなんとかなると言うのは分かった。だが言葉づかいは？ こればかりはどうしようもないぞ。」

「うふふふ。私を舐めないでよね。」

何か対抗策があるのか！？ いや、あるわけない！ ある……わけ……な……い、まさか。

「そつ、今から私が直々に徹底的に女の子の言葉づかいてのを叩きこんであ・げ・る♪」

え……。母さんが、直々に、徹底的……に……。

「い、いやあああああ！！！！！！！！」

そして次の日

「おはよう。 お母さん。」

「おはよう。 うふふ、元から声高かったからちよっと女っぽい喋り方にして、見た目を女の子にしたら違和感全然ないわね。 やっぱり私の目に狂いは無かったわ♪」

俺は今、桜聖の制服（セーラー服）を着ている。スカートのせいで足がスースーしてなんか嫌だな……。

「うっうっうっ……。 でも母さん、なんで俺を桜聖に通わせようと思ったんだ？」

「そんなの翔ちゃんの女装姿が見たいからに決まってるじゃない！」

「本物の息子じゃないにせよ、そんなこと要求するなよ！！」

俺と母さんは本物の家族ではない。

血が繋がってないってことだ。

俺は物心ついた頃から、実の父に虐待をされていた。

母は俺を産んですぐに亡くなったらしい。

俺は痛い思いをしたくなかったから、必死に勉強して、必死に運動して、一番を取って誉められようとした。

だが、あの父は自分はかなり落ちこぼれたのに比べ、俺は成績、運動、性格、容姿、全てにおいて完璧だった。

それ故にさらに虐待は激しくなった。

初めは、まだまだなのかと勘違いしてもっと頑張ったら、更に酷くなった。

周りの人はいつも傷だらけの上に完璧な人だったから、周りは遠くから見ただけで、俺は完全に1人だった。

そんな日が幼稚園の半分位まで過ぎたある日。

いつも通りまた痛い思いをするんだなと諦め気味に帰ったら、中から血の臭いがした。

最初は俺の血かと思ったが、朝行くときは臭わなかったから違うとすぐ分かった。

なら誰の？と思いリビングまで行くと、そこには心臓に包丁が刺さったまま倒れている父がいた。それを見たとき、嬉しさと悲しさから涙が出てきた。もう痛い思いをしなくて済むって言う嬉しさと、父が死んだって言う悲しさ。その後、この場にいたくなくなった俺は何も持たずに家を出た。子供で何もない俺はやがて疲れて倒れてしまった。その時、俺を拾って家で介抱してくれたのが今の母さんだ。最初は、また痛い思いをすることを思って家を出ようとしたら

「どこに行くの？」

って聞かれた。俺はどこに行く当ても無かったから、何も返せず俯いた。

「どこにも行く場所が無いなら、ここで住む？」

それは嬉しい誘いではあったが、当時の俺は大人はみんな怖いって思ってたから

「嫌だ！ どうせあなたも俺に痛い思いをさせるだ！ そんなことされるぐらいなら、今すぐ出て行く！」

痛い思いをされると思っていたから、急いで出ようとしたら質問をされた。

「どうして痛い思いを私がさせるの？」

どうしてそんな質問をつと戸惑いながらも俺は答えた。

「大人は自分にとって不快なことがあれば、直ぐに子供を攻撃する酷い人だからだ!」

あの時の俺にとって、大人はみんな父みたいな人だと思っていた。

「そうね。確かにそんな大人もいるわね。でも、どうして君はそんな風に思ってるの?」

母さんはあの時の俺にとっては意味不明なこと聞いてくるから、いつの間にか逃げるのも忘れ話込んでいた。

「だって俺の親がそうだったんだから。」

「……そのこと、聞かしてくれる?」

俺は聞かれたとき、何故か話してしまった。きっともしかしたらこの人は違うのかもって、感じたからかもしれない。

「う、うん。実は………ってことがあったの。」

喋ってる間、ずっと俯いてたから言い終えた後に顔を上げて、俺は言葉を失った。何故なら、目の前の人が泣いていたからだ。

「そう……なのね。そんな辛い目にあったのね。大丈夫、もう大丈夫だからね。」

そう言って俺を抱きしめてくれた時、俺は泣き出した。それからし

ばらくして

「ねえ君。一緒に暮らさない？ 私も夫を亡くして1人なの。」

「あなたも、1人、なの？」

「ええ。だから、一緒に暮らさない？」

そう誘われた時、すでに俺の心は母さんに完全に傾いていたから、すんなり受け入れた。

「うん。俺、あなたと一緒に暮らしたい！」

「うふふ、これから一緒に暮らしましょうね♪ あっ、そうだ名前は何？ 私は桐生沙璃よ。」

「俺は今井翔。あの、桐生翔って名前に変えても良い？」

「ええ。今日からあなたは私と家族なんだから、桐生って名乗りなさい♪」

「うん！！」

あの時から俺は、今井翔から桐生翔に変わり、母さんの家族の一員となった。

あれから母さんに鍛えられて、身体能力は常人を軽く凌駕してしまった。母さんは昔、自分で自分の流派を作ったらしい。そしてそれは、当然に俺にも受け継がされた。あの時は何回死ぬと思ったか……。母さんの期待には、絶対答えたいと言う思いがあったから何とかなったけど、それが無ければ今頃どうなってたか。考えるのも恐

ろしい……。

「そんなの関係無いわよ！ 私が女装させたいからさせるのよ！ つてどうしたの、翔ちゃん。」

「ちょっと母さんとの出会いのことを思い出してた。」

「そう。」

母さんの顔がとても優しくなった。

「どう翔ちゃん。今幸せ？」

うん。母さんに大事にされて、とても幸せだよ！」

「それは良かった♪ さて、今からちょっとメイクするわよ！」

「メ、メイクウウウ！！??？」

「そうよ。これから女学院に通うのだから、少しでもバレないようにしなきゃ！！」

「母さん、それもあるけど本音は俺にメイクしたいだけだろ……。」

「当たり前よ！ 今までは無理やりだったけど、これからしばらくは本人の了承を得てできるのだから、これほど嬉しいことは無いわ！！」

今回も無理やりとほとんど変わらないだろ……。でもこんなにも嬉しそうな母さんの顔を見てると……。

「はあゝ。分かった、素直にメイクされるよ。」

「あれ、やけに素直ね。もっと抵抗するかと思ったのに。」

「抵抗しても無駄ってのは分かってるし、母さんの嬉しそうな顔を見てるとまあ良いかなって思えてきた。」

「やったー！！ 翔ちゃんから許可が下りたー！！ さくて、時間もあまりないしさつさとやるわよ。」

そんなに嬉しいのか。まっ、時間も無いのは確かだし大人しくしてくか。

「ここをこうして、ここは………よし、完成！！」

どうやら終わったみたいだ。どれどれ、どんな感じかな。

「……………」

「ど、どうしたの翔ちゃん。私、どこか失敗した……？」

母さんが心配そうに聞いてきた。おっと、あまりの出来の凄さにしばらく呆けてしまったぜ。

「いや、大丈夫だ。あまりの出来に声が出なかったただけだ。」

「そう、ならよかった。さつ、翔ちゃん。早く食べて行かないと時間無いわよ。」

「うわっ！ほんとだ！」

時計を見て時間が無いのが分かったら、急いで食べて急いで準備した。

「えっと、忘れ物はと………よし、ないな。　母さん、行ってきますす！」

「あつ、ちょっと待ちなさい。」

「何？　時間無いから早くしてくれよ。」

「分かってるわよ。　行く前におさらいね。　まず昔教えた作法通りに振る舞いなさい。　言葉づかいは昨日みっちり叩き込んだからそれを。　名前は、翔のままじゃバレるから向こうでは咲さきって名乗りなさい。　良いわね？」

「分かった。　今度こそ行ってきます、母さん！」

「行ってらっしゃい。」

こうして、俺の女学院で女装しての生活が始まった。

第2章…これが……桜聖…

俺は今、女装をして街中を歩いている。もしこんなところを知り合いに見られて、俺だとバレたら俺の人生終わりだな…。

「あろう。」

「!! は、はい？」

「あなた、どこかでお会いしましたか？」

誰かに呼ばれ、定番のセリフを言うからどんなナンパ野郎かと思い、振り返って見た。

「!!!!」

そこにいたのは中学のクラスメイトで、少ししか話したこと無いけどナンパが出来るほどの勇氣は無い、内気な奴だったはず。そんな奴が話かけてきたってことは…。や、やばい!! やばすぎる!!

「い、いえ。 そんなことはないと思いますけど。」

「そうですか…。 すいません、少し雰囲気似ていたもので。」

「か、構いませんよ。 そ、それでは!!」

俺は別れの言葉を言ったら、すぐに逃げ出した。あ、危なかった…。1日目で、しかも知り合いにバレるとこだった…。もしバレてみんなに女装してるのが伝わったら…。

「桐生君って気持ち悪いね。」

「おい変態、近づくなよ。」

うわああああ！！いい、嫌だ！それだけは絶対に嫌だぞ！こうなった
ら、何としてもバレないようにしてやる。そう固く決意して、再び
桜聖に向けて歩き出した。あれ以降誰にも会わなかったけど……。
これは通学路を変えた方が良さそうだな。じゃないといつバレるか
分かったもんじゃない。そんなことを考えてると校門が見えてきた。

「ここが、桜聖……。」

遂に、遂に来てしまった。こんな所、来る予定なんか無かったはず
なのに……。そろそろ腹を括るか。

「よし！ 行こう！」

「お待ち下さい。」

「え？」

行こうとした直後に止められた。いったいなぜ？振り返ると、そこ
には警備員らしき女性がいた。俺はこの生徒なんだから、止めら
れる理由なんて無いはずなのに……。はっ！まさかバレたとか！？

「学生証を見せて下さい。」

が、学生証お？何で学校に入るだけで学生証がいるんだ？制服を着
てるんだから問題ないはずじゃ……。

「学生証を見せて下さい。もし持っていないなら不信人物として、
警察に突き出しますよ。」

け、警察うう！？は、早く出さないとヤバそうだな……。

「これです。」

「ふむ。」

何かすっごい念入りに調べてるな……。あつ、何かの機械に通してる。あれは何の為に？

「はい、ありがとうございます。偽物ではないようなので通って良いですよ。」

偽物では無いつて何で分かったんだ……つてさっきの機械か。どうやらあれで本物が偽物かの違いが分かるらしいな。でもあんなこと、全生徒に対してやってるとしたら……。気が遠くなる作業だな。

「どうしたんですか？ 早く行きませんかと入学式に遅れますよ。」

「あっ！ 教えて下さりありがとうございます。それでは！」

俺は走って体育館に向かった。走るときにも走り方に気をつけなければならぬから、いつも以上に疲れた……。はあ、来て早々こんなんじゃないが思いやられるな……。

この学校は入学式のときは適当に座らして、終わった後にクラスを教えてくれて、それから言われたクラスに行くことになってる……らしい。ともかく人が少ない所に座って始まるのを待つとするか。それにしても……。右を向いても左を向いても、四方八方どこみても女、女、女。こんなにかなり恐怖を感じるな……。早く帰りたいなあ。

「皆さんおはようございます。今日からあなたたちは……………」

「さて、次は校歌を歌って貰います。皆さん、ご起立下さい。」

[♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪]

「~~~~~♪~~~~~♪~~~~~」

16

ここは生徒からの一言とかは無いか。まああれもいらぬいしね。

『ここに紙を貼ってます。 右側の列から順番に見ていって下さい。』

俺はいつかなあ……って一番目かよ。ならさっさと見て戻るか。さて俺は……無いな。……何故に？

「あつ。」

そう言えば名前は咲に変えてるんだったな。すっかり忘れてたぜ。えーっと、咲、咲、咲とあったあった。1年9組、最後のクラスか。

『それでは前の方は降りて下さい。 次の列の方、前の方が降りましたら見に来て下さい。』

あつともう終わりか。さっさと降りるか。席に座り、時間が経つのをただひたすら待った。

『皆さん自分のクラスが分かりましたね？ それでは次は、先生の発表です。』

先生の発表か。別に誰でも良いから適当に聞き流すか。

『私は1組………はい、有難うございました。これにて入学式を終わります。 皆さん、自分の教室にお戻り下さい。』

さてと、確か9組だったな。行くか。

「ここが9組のようですね。」

9組に着いた。まだ誰も来てないみたいだし、先に入って座って待つ。ここは周りは女子しかいない上に、作法などを考えないといけないから、ただ話だけで疲れてしまう。座って待っていると、続々と人が入って来て、全席埋まった。埋まったと同時に先生が入って来た。

「先程も紹介しましたが、もう一度紹介します。私の名前は笹瀬麗子れいこです。今から皆さんに自己紹介をして貰います。1番の方、前に出てきて下さい。」

自己紹介か。面倒だな……。さすがにバレはしないと思うが……。あまり人前に立ちたくないし目立ちたくもない。そんなんではバレたら俺は終わりだ……。

「次の人は……桐生さんですか。　お願いします。」

遂に俺か。当たり障りの無いことと言って済みますか。

「私の名前は桐生咲です。　よろしくお願いします。」

完璧だ！喋り方、お辞儀の仕方、歩き方、座り方、全てに置いてミ

スは無いはずだ！

「はい、有難うございます。では次の方……………」

この後も俺は、ただただ座って前を向いてるだけで過ごした。今は一限目のHRも終わり、休み時間である。だが俺は話しかけない。周りは既に話し掛けたりしているが、俺は話し掛けない。自分から話し掛けて、もしボロを出したら目も当てられない。ここは静かに時間が経つのを待てば良いのだ。

「桐生さん。」

「！！ は、はい？」

話し掛けられた！くそっ！ボロを出さないよう気をつけなければ！！

「少しお話しませんか？」

どうする俺！？ここで断れば怪しまれる、かと言って話ていればボロを出すかもしれない。どうする俺！！

「桐生さん？　どうかしたんですか？」

「あ、は、はい。　良いですよ。」

しまったあああ！！OKしてしまったあああ！！こうなったらボロを出さないよう、細心の注意を払って会話をするか。

「有難うございます。では何を話しましょうか。」

そっちが話掛けて来たのに話題の準備してないのかよ!!

「よう綾。 どうした？」

「あつ、舞ちゃん。」

また誰か増えたぞ。くそっ！人が増えると困るな。だが一度OKしたんだから、今更無しには出来ない。ええいこうなりやヤケだ！

「こちらの方が私に声を掛けて下さったんです。」

「ん？ 君は？」

「私は桐生です。 あの、あなた方のお名前は？」

「あつ、私は波井綾なみいあやです。 よろしくお願いします。」

「私は鈴堂舞りんどうまいだ。 よろしく。」

ふむ、少し冷静に（ヤケに）なったところで、この2人をじっくり見てみるか。さっきまで焦りまくって、見てる余裕なんか無かったからな。んゝ綾は髪が腰近くまであって、なんか大和撫子みたいな雰囲気だな。それで舞は髪は短くて、ボーイッシュな感じだな。ん？波井に鈴堂？どっかで聞いたこと有るような……。

「あっ!!」

「どうかしたんですか？ 桐生さん。」

「桐生、何かあったんか？」

「もしかしてあん、あなた達は波井財閥と鈴堂財閥の娘さん達ですか!？」

あぶねえ。危うくあんたらとか言うところだったぜ。

「はい、そうですよ。」

「そうだけど。」

「へ、へえ。そうなんですか。　凄いですね。」

いきなり凄い奴らに声を掛けられたな。ってちよつと待て、もしこの2人に俺の正体がバレたら、それはこの日本を支えていると言っても過言じゃない、2つの財閥にバレるってことで、そうなる俺は……。絶っっっ対にバレてはならない! 何が何でも隠し通すぞ!

「何が凄いんだ?　ただ親が凄いで、子供は普通だよ。」

「そうです。　私達は普通ですよ。」

ん? 何かコイツら随分自分のことを低くしてるな。何でだ?

「あ、あの、どうして、そんなに自分を低くするんですか?」

子供とは言えあの財閥の子供何だから、少しは偉そうにしても良いのに。まあアニメや漫画にいる令嬢みたいに、口元に手を当てて『オーッホホホ』とかは言わなくても良いけどさ。でも何か、ちよつとだけ辛そうな顔してるな……。

「昔から皆さん、私達が財閥の娘だから必要以上には話をしたりしないで、友達が出来なかったからこれからは出来るだけ家のことは否定して、友達を作ろうかと思ったんです。」

なるほどな。金持ちの家に生まれても、良いことばかりでは無いって訳か。この2人も苦勞してるんだな。

「そうですか。　すいません。」

「い、いえ！　謝らなくても結構です！」

「そ、そうだよ！　気にすることないって。」

「ですが……。」

知らなかったとは言え、あまり言いたくないことを言わしたことは変わらないしなあ。

「なら、私達と友達になってくれませんか？」

「え？」

友達？それは良いことなんだろうか？それとも悪いことなのだろうか？友達になればこの学院生活も、少しは楽しくなるだろう。でもその分バレル危険性は一氣に跳ね上がる。これはどうするのが最良なのだろうか……？

「ダメ……ですか。」

「そう……だよ。　財閥の娘とは友達になりたく無いよね……。」

それを言った時の2人の顔は、何かを諦めたような悲しい顔をしていた。その顔を見たとき、俺の心は決心した。

「いえ、良いですよ。」

「い、良いんですか？」

「ほんとに良いの？」

「はい。 私からもお願いします、友達になって下さい。」

「は、はい！」

「う、うん！」

この時、俺達は友達になった。

第3章：俺はマザコンじゃねえええ！！

綾と舞、2人と友達になって、休み時間は適当に話して時間を潰した。

でも今頃なってちょっと後悔……。

友達を作る＝バレる確率アップ。これがあると分かっていたながら了承してしまったのはちょっとだけ後悔している。でも2人と友達になったこと自体は全然後悔していない。寧ろ幸運とまで思っている。でももし正体がバレたら……。い、いや！バレなければ良いんだ！バレたらなんて思っていたらほんとにバレるぞ！

「ではHRを終わります。」

あ、あれ？考えごととしてたらいつの間にか終わって……。まあどうせ大したことは言っていないだろ。

「桐生一緒に帰らない？」

「はい、良いですよ。」

うむ、我ながら完璧な返事だ。こんな風にしていれば、バレる事なんて有るわけ無い！

「じゃあ3人で帰ろう！」

「はい。」

今は3人で帰ろうと思って玄関まで来たけどここで疑問が生まれた。

「お二人とも、帰り道はどちらですか？」

俺は校門を出て真っ直ぐだけど2人はどうなんだろう？もし違えば此処でお別れか。

「私と舞ちゃんは校門を出て真っ直ぐ行った後3つ目の角を右に曲がって、その後はバスです。」

あそこのバス停か。てか結構道同じだな。

「お二人とも真っ直ぐですか。実は私も真っ直ぐ何です。私は3つ目の角を左にですけど。」

「そっか、ならちようにいい感じだね！」

「はい。あの、お二人はお家が近いのですか？」

せっかくだし聞いてみるか。何がせっかくなのか知らないけど。

「はい。私と舞ちゃんは隣同士ですよ。」

「だから行きも帰りも一緒なの。」

家が隣同士……。日本の企業の最高位に値する2人が隣同士か。泥棒も狙いにくいな（たぶん）。

「そうなんですか。だからお二人はとても仲良しなのですね。」

「はい♪ 私と舞ちゃんは大親友なのです♪」

「そうね。綾とは大親友ね！」

2人ともほんとに仲良いよな。やっぱり同じ境遇の者同士、惹かれ合ったのかな。

「桐生には私と綾みたいな大親友とかはいないの？」

大親友、ねえ。いるとしたらあの人ぐらいかな。

「大親友って訳では有りませんが、心から信頼しているのはお母さんですね。」

「もしかして桐生ってマザコン？」

「んなっ……こと有るわけ無いじゃ無いですか。」

危うく怒鳴るところだった……。確かに母さんが一番信頼してるけど、別にマザコン何かじゃない。

「えー。桐生みたいなのってマザコンじゃないの？」

だから違うと言ってるだろ！

「あのですね、マザコンと言うのはですね、マザーコンプレックスの略称で、男性が母親を慕うあまり女性をうまく愛せない傾向にあ

る方のことを言います。そして私のは慕っているのとは少し違う上に男性では有りません。だから私はマザコンでは無いのです。分かりましたか？」

「「わ、分かりました。」」

「よろしい。」

ふう〜。俺がマザコンなわけないだろ！信頼はしてるけど慕ってるってのは少し違うんだよね〜。てか自分で男性じゃないって……。言わなければならぬとはいえ、何かかなり虚しいな……。

「ねえ桐生。一つ聞いて良い？」

「はい？ 何ですか？」

何だろう？ しかも2人で顔を合わせて頷いてる辺り、結構重大な事なのかも……。も、もしかして男だとバレたとか！？ そんなはずは無い！俺は何もミスをしてないハズだ！

「「桐生^{さん}って、私達に何か隠し事してますか？」」

「「！！！！」」

バ、バレそう！まだギリギリバレてないけどこれはやばい、やばすぎる！！どうする、どうする俺！！

「どうなの桐生。」

「ど、どうなんですか桐生さん。」

「い、いえ、別に隠し事なんて……。」

「私達の目は誤魔化せないよ。一見普通に見えるけど、何かこう雰囲気が違うんだよ。私達は財閥の娘だからいろいろな人に会って話をしている。でも相手のことは知らないから、私達は相手の雰囲気を読み取って、それに合わせて会話出来るよう頑張ったんだ。だから相手が何か隠し事していても私達には分かるの。」

くっ！まさか初日からバレるとは、相手が悪かったか！こいつらと友達になったのは失敗か？でもあの時の悲しそうな顔を見ると、ついついOKしてしまった……。とにかく後悔をするよりも今は、この状況を何とかしなければ俺の人生が終わる！！

「で、ですから隠し事など……。」

「確かに私達に隠し事が有るのは、今日友達になったばかりなのですから、あってもおかしくは有りません。ですが桐生さんのは私達だけではなく、全員に隠し事をしているみたいなのでただ事じゃないと思います。」

まさか俺が学院全員に隠し事をしてることまでバレていたとは。これは予想外だった……。どうする、どうする俺！！こうなりやケだ！

「……私が隠し事をしていることは認めます。ですがこれは、お二人には話すことが出来ないことなのです。すいません。」

「……そっか、やっぱり言えないような隠し事か。まあ桐生には友達になってくれた恩もあるし、隠し事が何かは聞かないでおこう

！綾もそれで良いよね？」

「はい！桐生さんは私達の初めてのお友達ですから、言いたくないことは聞きません。」

「有難うございます。」

な、何とかバレずに済んだ……。でも初日からバレかけるとは思ってもいなかった。しかも仕草とかじゃなく雰囲気って……。流石にそこまでは防げるか！

「あっ、もう曲がり角だ。それじゃあ桐生、さようなら！」

「桐生さん、さようなら。」

「お二人ともさようなら。」

曲がり角で俺達は別れた。さて、さっさと帰って着替えるか。女装なんてやってられっか！てかこの通りは朝、昔のクラスメートだった奴と会った場所だ。ここは良い思いでの有る場所じゃないから早く帰るか。

「ねえその彼女、今暇あ？」

ナンパか？相手の子もついてないね。でも俺は助けない。ナンパぐらいは自分で何とかして下さい。

「ねえ暇って聞いているんだけどお。」

無視するなんて凄いな。あいつらはしつこい上に無視されるとキレ

るからなく。って誰だよ、肩を触る奴は。

「ねえ暇あ？」

ナンパの相手って俺かよ!! 男が男にナンパされるとか……。やべ、泣きたい……。兎に角さっさと帰って貰うか。

「すみません、これから忙しいのです。」

「忙しいってなんかあんのお？」

最後を微妙に伸ばすのが凄いムカつくな……。

「はい。家に帰って着替えてテレビを見なければいけないんです。」

「それって暇って事だよねえ？　なら今からどっか行かないい？」

さっき暇じゃないと言ったろ! 何するかまで言ったじゃないか! ……
：あんな事言ったら暇って言ってるのと変わらないな。

「ねえ、行こうぜえ。」

あーうぜえ。こうなったら無理やり帰ってもらうか。

「ねえねえ、行こぐふっ!？」

「キャー! ! ! 突然人が、人が! ! !」

叫んでるのは俺。気絶さしたのも俺。俺は男に見えないスピードで、

拳を腹にお見舞いして気絶させたのだ。

「誰か、誰か救急車を!!」

これだけ叫んでるなら誰か救急車を呼ぶだろう。さて、みんなの意識が男に向いてる間にさっさと帰るか。

「ただいま……。」

「おかえりー。」

あれからは何も無く帰ってこれたけど、何だかめっちゃくちゃ疲れた……。早く着替えよ。

「母さん、着替えてくるからお茶入れって。」

「はい。」

母さんにお茶を頼んで俺は着替えた。着替え終えて降りてくると母さんがお茶を用意していた。

「翔ちゃん、もう直ぐだからちよつと待ってね。」

「おう。」

待つ間はテレビでも見てるか。少ししたら母さんがお茶を持ってきた。

「はい翔ちゃん。」

「有難う母さん。」

「それで翔ちゃん、学院はどうだった？」

やっぱり聞かれたか。まあそれぐらいは予想してたけど。

「どうもこうもない。兎に角疲れる。周りは女子ばかりだし、いつバレるか分からなくてドキドキしっぱなしだ。」

「そろそろね。友達は出来た？」

「2人出来たよ。」

「誰々!!」

そんなに知りたいのかよ。別に母さんには関係ないだろ。

「波井綾って人と鈴堂舞って人。」

「波井綾と鈴堂舞？ それって波井財閥と鈴堂財閥の娘？」

「そうだよ。」

「へー！ 凄いじゃん翔ちゃん！ あの2人と友達になるなんて！」

「そうでもない。今日の帰りに俺が隠し事してるのがバレたからな。」

「え!？ あの2人ってそんなに鋭いの？」

「かなりね。てか俺がボロを出したとは思わないんだな。」

「翔ちゃんがそんなミスするはず無いって信じてるから！」

そこまで信じてくれてたのか。なんか嬉しいな。

「有難う母さん。」

「どう致しまして。」

さて、報告も終わり見たいテレビもなくお茶も飲み干した。何しよ
う……。今日はいろいろ有ったから少し寝るか。

「母さん、疲れたから少し寝てくる。」

「分かったわ。晩ご飯出来たら起こしてあげる。」

しかし今日はほんと疲れた……。周りは女子しかいないわ、女子の
真似をしなきゃならないわ、正体バレかけるわ、ナンパに捕まるわ
……。一体何なんだよ……。とりあえず寝て疲れを癒すか。

「翔ちゃん！ 晩ご飯出来たわよー！」

「ん……。」

もう飯か。何か全然寝てない気が……。疲れがまだ取れてない……。

「ふあああ。 母さん、今日の晩飯何？」

「今日は焼き魚よ。 さっ、食べましょ。」

「うん。」

今日は焼き魚か。俺は嫌いな物が特に無いから問題無いや。と言うか正確には有ったんだけど、母さんが作るとめっちゃ美味しくなくて嫌いじゃ無くなったんだよね。母さんすげえ……。

「翔ちゃんどうしたの？ 食べずにこっち見て。」

「いや、母さんはすげえなあって。」

「そう？ 別に普通よ。」

他人の嫌いな食べ物を好きにさせたり、我流の技を編み出したりするのは一般家庭で普通なのか？……絶対普通じゃないだろ。

「絶対普通じゃない。」

「普通よ。」

「違う。」

「普通。」

「違う！」

「普通！」

こんな無駄なやり取りをしながら晩飯を食べ終えた。それから、また母さんと一緒にテレビを見て、適当な所で止めて自分の部屋に来了。

「今から何をしよう……。明日の予定でもするか。」

明日の予定を使用したのは良いが、明日何するか知らね……。教科書とかはまだ配られてないから筆記用具だけで良いか。

「マジでやることねえ……。」

どうしよう……。もう寝るか？いつもより少し早いが寝るか？やることもないし、起きてても仕方ないから寝るか。

「お休み。」

誰かに言う訳でも無いけど、口に出してしばらくしたら夢の世界に行った。

第4章：俺は男なのに……男なのに！

「翔ちゃん！ 朝ご飯出来たわよー！」

「うん。」

もう朝か。少しは疲れが取れたかな。母さん呼んでるし早く行くか。

「母さんおはよう。」

「おはよー翔ちゃん。 朝ご飯出来てるわよ。」

「うん。 いただきます。」

「はい。」

朝はやっぱり食パンだな！後は卵があればそれでよし。今日も学校だし早く食べるか。

「ご馳走様。」

「お粗末様。 さーて翔ちゃん♪」

「何？ ってあれか……。」

「そっ！ メイクタイム♪」

またメイクか……。嫌いとは言え学院に行くにはメイクしないと行けないし……。何で女学院なんだよ……。

「分かった……。ちゃっちゃと終わらせてくれ。」

「まっかせなさい!!」

そして直ぐに母さんにメイクをされ、服を着て昨日と同じ姿になった。やっぱりスカートは履き慣れないな……。慣れたく無いけど。

「はぁ。俺も自分でメイク出来るようするべきかな。学院でメイクが落ちたら困るし。」

「ダメダメダメ! 翔ちゃんはメイク覚えちゃダメ! 私の一番の楽しみを奪うつもり!?!」

「何で息子を女装させるのが一番の楽しみ何だよ!! おかしいだろ!」

「こんな綺麗な息子を持ったら誰でも思うわよ!!」

俺男なのに母親から綺麗とか言われた……。物凄く悲しい……。俺は、俺は男なのに……。

「はぁ。母さんの楽しみを奪う奪わないは置いといて。」

「置いとけないわよ!! そこかなり重要よ!?!」

「もし学院でメイク落ちたらどうするの? バレるかもよ?」

「む、無視された!? あっ、学院でメイクが落ちても大丈夫よ。」

無視は当たり前。こんな母さんのやり取りにつきあっていると、時間がいくら有っても足りやしない。てか何故大丈夫と言い切れる？

「何で言い切るんだよ。バレるかもしれないだろ。」

自分でバレると言い切れない辺り、泣きたくなりそう……。

「大丈夫よ。翔ちゃんはメイク無くても服装さえ女の子にしたらバレないわよ。」

そうなのか……。俺は男なのに服装だけで女と間違えられてしまうのか……。ってか

「それじゃあメイクする意味無いんじゃないね？」

「それはほら、私がした……保険よ。」

「今母さん『私がしたいからに決まってるでしょ！』って言おうとしただろ！」

「そ、そんなこと無いわよ？ 保険よ保険。」

「じゃあ何で目が泳いでるんだよ。」

めっちゃくちゃ目が泳いでるし。この様子だと俺が言ったことで間違いないだろ。何気に言いかけてたしな。

「そ、それはほら、何か珍しい物は無いかなって探してるのよ。」

「話すときは相手の目を見て話せと言ったのは母さんだよ？」

「うっ……。」

「いい加減認めたら？ 別に怒る訳じゃないんだから。」

「……………はいそうです。 私がやりたいからです……………」

少しの沈黙の後、素直に認めた母さん。てか隠してた意味が分からない。別にそんなに意外な事でも無いし。

「何で母さん隠したの？」

「んゝ何となく？」

何となくかよ。母さんのせいで無駄な時間を……………って！！時間忘れてた！！今何時だ！！？

「母さん今何時！？」

「今？ えゝっと、8時20分ね。」

8時20分！？学院には30分までには着かないといけな上に、たどり着くのに歩いて30分はかかるんだぞ！？間に合うのか！？

「母さんヤバイ！ 時間が無い！」

「そうね。」

「何でそんなに冷静なんだよ！」

何か母さんが有り得ないぐらい冷静なんですけど!?!この人おかしいだろ!

「だって翔ちゃんがちょっと頑張れば直ぐ着くでしょ?」

「そ、そりゃ不可能じゃないけど……。あれ疲れるんだよ。」

「遅刻するのと疲れるの。どっちが良い?」

何だよその質問。答えはほぼ決まってるじゃないか……。

「はあ。仕方ない、少し頑張りますか。」

「そうそう、頑張っちゃいなさい!」

「はあ。」

とりあえずやりますか。そう決心した翔は目を閉じて集中し始めた。

「桐璃流^{とうりゅう}1の章、瞬脚。」

そう呟いた途端に翔は消えた。

「自分で考えた技だけど、見るのは良いわね。」

「この辺りで良いか。」

学院まで後3分程で着く場所で止まった。

さっき使った技は別に特別に凄くも何ともない。

ただ走るのが早くなるだけだし。

まあそのお陰で間にあっただけけど……。

とにかくこれはもう二度と使いたく無いな。

あれ使うと足が結構疲れる。

まああれはただの技で、奥義に比べたら屁でも無いけど……。

と言うか使いたくない。

そもそも俺が覚える必要あったのか？母さんの頼みだから覚えただけど、普通に生活するなら絶対要らないだろ。……兎に角二度と使うときが無いことを祈ろう。俺は普通の運動神経ですら常人を越えてるし……。やべー、マジで必要性を感じねえ……。そんなこと思ってたらいつの間にか学院に着いていた。門をくぐったけど警備員は来ない。どうやらあれは初日だけのようだ。って早く教室行かないと遅刻だ！

「今日のHRは委員を決めたいと思います。どなたか立候補する人はいますか？」

あれから無事授業に間に合い、今は1時間目のHRだ。

委員か……。

前の学校では風紀委員と言う糞ダルいのをやったな。

朝早くから学校の校門前に立って、登校時間が終わるまでずっと挨

撈をするだけ。

夏は暑すぎて汗はダラダラ出てきて、冬は寒すぎてガチガチ震えながらも挨拶をする。

この時俺は風紀委員は二度とやらないと決めた。てか立候補する人っているのか？共学でも、馬鹿な男子はカッコつけようとして立候補する奴はいたが、女子はゼロだったからな。そしてここは女学院で、全員が女子（俺以外）。これは先生が勝手に決めるとか、生徒に推薦させるとか、あみだやくじ引きなどの運で決めるとか……。まあ俺には関係の無いことだ。

俺はこのテストは受けてないから皆俺の成績については知らない。つまり先生に決められたり推薦されることは無いと言って良い。

友達は綾と舞と2人いるが、まだそんなに話はしてないから推薦されることは無いだろう。そして立候補はまず無い。バレない為にはひっそりと生活をしなければいけないのに、なんで自分から目立つことをしなければいけないんだって話だ。すでに綾と舞と友達になってバレかけたんだからこれ以上はまずい。とにかく静かに待つか。

「誰もいないのですか？　ではこちらで決めさせて貰います。」

やはり先生が勝手に決めるのか。これで俺が委員になることはまず無くなったな。

「まずは委員長、副委員長を決めます。委員長は鈴堂舞さん。

そして副委員長は波井綾さん。この2人をお願いしようと思いきすけど皆さん良いですか？」

「「はい。」」

「ちょ、ちょっと待って下さい先生！　なんで私達が選ばれたんですか？　理由を教えてください。」

「お、お願いします!」

2人とも選ばれたことに少し不満があるのか? まあ気持ちは分かるけど。

「理由……ですか。 お2人とも有名財閥の娘さんなので、普通の人よりは人前に出るのに抵抗が無いかと思ひまして。」

「そ、それは確かにそうですね……。」

「…………。」

綾は特に文句は無くなったなようだが、舞の方はまだ少し納得がいかないみたいだな。

「後、鈴堂さんは昨日見た限りでは明るそうな方だったので、委員長になってクラスを盛り上げてくれると思ひました。そしてその補佐に知らない人を当てるより、仲が良くて息が合うのは波井さんだと思ひたので、副委員長は波井さんにしました。」

ふむ。理由も結構普通だな。これならあの二人も特に否定もしないだろう。

「…………分かりました。 私が委員長をやります。」

「そうですね。 有り難うございます。 波井さんはどうですか?」

「舞ちゃんがやるなら私もやります。」

「有り難うございます。では、他の委員も決めましょう。」

無事委員長と副委員長という一番厄介な委員は決まったな。

あとはそんな凄いのが残ってないし、さっきの理由通り俺が選ばれることは無いと言って良い。おっ、委員決めもいつの間にか終わってるぞ。きっと先生が勝手にドンドン決めたんだな。さて、無いと思うが一応確認しとくか。もしこれで選ばれたのに見てなかったら後々面倒だしな。えっくと俺の名前はと……よし、無いな。ふう、とりあえずは安心だな。

「はい、委員も決まりましたのでH Rを終わります。」

終わったー！！さーと、今から何するかなーって言ってもまだ授業全部が終わった訳じゃないから帰れないけど……。どうせ暇だし二人の所にでも行くか。

「波井さん、鈴堂さん。」

「ん？ 桐生か。どうした？」

「桐生さん？ どうかしましたか？」

二人して不思議そうな顔をされてしまった。いくら俺から話しかけるのが珍しいと思っててもそんなにハッキリと顔に出すなよ……。分かんなくても無いけど。

「少しお時間が出来ましたので、友達らしくお話でもしようかと。」

「へえ、桐生から誘うなんて珍しいね。」

「確かにね。」

「そうですか？」

確かに普段の俺ならそんなことしないが、この二人はは普段の俺を知らないから珍しく思うことは無いはずだが……。

「ああ、桐生はどちらかと言うと人が勝手に集まって来るから、わざわざ自分から誘うなんてことは無い。」

「なんで私には人が寄ってくると思ったんですか？」

「前にも言ったでしょ。 私達は相手の事が何となく分かると。」

「ああ、ようやく理解しました。」

成る程な、それなら納得だ。ならこの二人相手の時は無駄に飾らず、最低限女らしくするぐらいにしないと逆に怪しまれるな。

「まあそれは良いとして、ほんとにどうしたの？ ただ話するために来たの？」

「はい、それもありますがとりあえずはお二人とも、委員に就任できておめでとうございます。」

「ありがとう。」

「ありがとうございます。」

「いえいえ。」

ふむ、二人もそんなに嫌がってはいないようだな。それなら良いや。

「でもほんと、なんで先生は私達を選んだんでしょうね？」

「えっ？ 先生はちゃんと理由を仰ってましたよ？」

なんで今更そんなことを？ 先生は理由を言って、この二人は納得したから委員になったのに……。

「確かに仰ってましたけど、それでも何故か疑問に思うんですよ。」

「まあ綾が疑問に思うのも分からなくも無いが、とりあえず先生には良い印象を持って貰えてるとハッキリしたんだからそれで良いじゃないか。」

舞は綾の疑問が分かるのか。俺にはさっぱり分からん……。

「……………そうだね。 今更言っても仕方ないし、前向きに考えれば
いっか。」

綾はもう疑問のことは忘れることにするみたいだ。俺は未だに釈然としないが、自分のことだから深くは考えないことにした。それから適当に話していたら先生が来て、授業が始まった。

第5章：俺はパシリじゃないからな！

「桐生、帰ろう。」

「桐生さん、帰りましょう。」

「はい。」

あれから授業も終わり、下校時間になった。そして今日も二人と一緒に帰ることになった。まあ今更二人と帰っても問題は無いだろう。すでに俺の事は詮索しないと約束してるし。

「それにしても私達が委員か……。何だかあまりピンとこないわね。」

「うん。何でだろう？」

「お二人は今までに委員になられたことは無いのですか？」

口振りからして無いとは思うが、それだとかかなり不思議だな。二人は、特に舞は委員長や風紀になっててもおかしく無いのに……。

「ええ、私達は前は周りからは遠巻きにされていたから委員にはならなかったのよ。」

あつ、そう言えばそうだったな……。これは不味いことを聞いてしまったな。

「す、すいません……。」

「どうして桐生が謝るの？」

「だって、私が聞いたせいであまり言いたくない過去の事を話す事になってしまっ……。」

「そんなの別に気にしてないわよ。綾もそうでしょう？」

「うん。桐生さん、私達は別に気にしてませんから桐生さんも気にしないで下さい。」

「はい、分かりました。」

良かった、とりあえず二人は気にしないみたいだ。

「それと桐生、敬語は止めて普通に話してくれない？ 私達は友達でしょ？ 綾も。」

「私は良いよ。桐生さんは？」

「私は……。」

敬語を止める。それはつまり普段通りに喋るってことになる。そして俺は男だから普段通りに喋ると男口調になるからバレる可能性がアップする。でも二人には俺が無理に敬語を使ってるのはバレているはず。どうするよ……。どっちを選んでもあまり良い結果にはならないぞ！

「……………少し考えさせて下さい。」

「そう、分かったわ。別に無理強いはしてないからそこまで気にしないで良いわよ。」

「はい。」

「それともう一つ。」

「何ですか？」

まだあるのか……。これ以上は勘弁して欲しいな……。でないとマジでバレてしまう。バレると絶交の可能性大だし……。

「お互いに名前で呼び会わない？　ずっと苗字で呼び会ってるのは何だか違和感があるし。」

「これも私は賛成だよ。桐生さんは？」

名前で呼び会うか……。これぐらいなら問題は無いだろう。

「はい、良いですよ。」

「分かったわ。これからは咲って呼ばして貰うわね。」

「私は咲ちゃんて呼んでも良いですか？」

さ、咲ちゃん……。男の俺がちゃん付け呼ばわり……。何だかすごい複雑な気分だけど……。

「はい、どちらも良いですよ。」

「おっけー。これからよろしくね、咲。」

「やったー！　よろしくね、咲ちゃん！」

「よろしくお願いします。」

綾って最初は結構固かったのに打ち解けた瞬間にすごい砕けた喋り方に変わったな……。まあ俺としても今のうちに砕けた調子の方が好きだから良いんだけどな。でも俺は……。俺は砕けた喋り方をするわけにはいかないんだ。俺が無事に高校を卒業するためには誰にもバレ無いようにするしか無いんだ！

「あつ、もうお別れか。　じゃあね咲ちゃん。」

「じゃあな、咲。」

「はい、お二人ともさようなら。」

こうして二人とは更に親密になって今日の下校は終わりを告げた。

「ただいま。」

「お帰りなさい。」

今日は何も無く帰れた。知り合いに会うことも無かったしナンパも無かったし事件も起きなかったし。でも無事に帰ってきたのは良いけど何しようかな……。とりあえず早くこの服を脱ぐか。

「ねえ翔ちゃん、これから暇？　暇だよ。　暇ね。　じゃあお願いね。」

ちよっ！何勝手に話し進めてるんだよ！俺まだ何も言ってないぞ！

「ちよっ、母さん待て！　何勝手に俺の予定決めてるんだよ！」

「だって翔ちゃん暇でしょう？」

「うっ、ま、まあ暇だけど……。」

図星なだけに言い返せない……。うう……。

「なら良いじゃない。」

「はあ。　分かったよ。　それで、お願いって何？」

こうなったら諦めるしか無いか。どうせ口論しても俺が母さんに勝てるわけ無いし。言ってて虚しくなるな……。

「あっ、お願いってのはね、ちよっと買い物に行ってきた欲しいのよ。　今日の晩御飯を作るのに足りない物があったから。」

「それくらいなら別に良いぞ。　それで、何を買ってくれば良いんだ？」

「んと、人参と玉葱をお願い。」

「おっけー。 んじゃ、ささっと行ってくる。」

「お願いね。」

「行ってきました。」

んじゃさつさと終わらすか。こんなことで何時までも時間を取られたくは無いらな。買う場所は何処にしよう？ 近くのスーパーにするかちょっと遠い商店街で買うか。ん………商店街にするか。遠いと言ってもスーパーよりも歩いて10分程多く掛かるだけだし。よし、目的地も決まったし行くか！

そして商店街に着いた。えーと、買う物は確か人参と玉葱だったな。ならこの曲がり角を左に曲がったら直ぐだな。

「いらっしゃい！ 何が欲しいんだい？」

「えーと。」

自分で選ばないと損だ。お店に売ってるのも品質が他のより良いのはあるからな。人参は………これだな。玉葱はこっちだな。

「すみません、この二つお願いします。」

「はいよ！ 二つで150円だ。」

結構安いかな？ つか母さんから金貰ってないや……。とりあえず今は俺が立て替えるか。大した額じゃないから余裕だ。

これで任務完了だな。さて、帰るか。でもこのまま帰ってもやること無いし……。どうせ暇だし散歩でもするか。

そう思ってまず来たのは公園。ここは結構な広さがあって遊具もあれから子供などが遊ぶには最適な場所だ。まだ昼間だから子供が楽しそうに遊んでるな。でも見ても詰まらないし次行くか。

次に来たのはまたまた公園。

こっちは公園と言っても良いのか微妙なんだよな……。

端の方に砂場と滑り台ぐらいはあれけど、他に遊具は無い。それにさっきの公園に比べると狭いし。

でもここには真ん中に大きな噴水があって、その周りにはベンチがたくさんあって、疲れた心身を休めるにはピッタリの場所だ。

でも俺はあまりここには来ないんだよな……。

ここって家から結構遠いんだよ。

歩いて20分以上は掛かるから、わざわざ20分も掛けて歩くぐらいなら家でゴロゴロしてる方が十分疲れは取れるし。

まあ今日は散歩がてらここまで来たから少し休憩するか。そう思っ
てベンチを探してみたら一カ所だけ空いてたからそこに座ることに
した。そのまま噴水を見ながらのんびりしてたら段々眠くなってきたぞ……。最近
は学校のせいで疲れが貯まってるみたいだな……。

少し寝るか。そして目を閉じたら直ぐに眠ってしまった。

「ん。」

い、今何時だ？自分ではあまり寝てないつもりだけど、そう言う時間に限って実は時間が凄い経ってたりするんだよね。んで今の時間は……5時か。あれから1時間寝たか寝てないか位だな。それにしても丁度良い時間に起きたな。早いとこ帰って頼まれた物を渡すか。

「にゃあゝ。」

ん？今猫の声がしたような……。空耳か？

「にゃあにゃあゝ。」

どうやら空耳じゃ無いみたいだ。でも何処から聞こえたんだ？俺は今ベンチに座ってる。見渡しても猫はいない。草むらは結構距離が有るからこけまです声は聞こえないはず。なら何処だ？

「にゃあゝ。」

まただ。今度は何処から聞こえるかに注意してたから大体の場所は掴めた。でも聞こえたのは下からだった。……。まさか。

「やっぱり……。」

ベンチの下にあった段ボールの中に入れられてるし！しかも俺が来たときは無かった筈だし。ってことは俺が寝てる間に誰かが置いて行ったことになる。……これはあれか？俺に拾えと、そう言う意味なのか？まあどっちにしろ見つけたからにはとりあえず拾うけど。

「さて、猫を拾ったなら尚更早く帰らないとな。　って段ボールの中に2匹もいるよ……。」

中見たら2匹いるからビックリだ。とにかく早く帰るか。

「只今。」

「お帰り。　あら？　その段ボールはどうしたの？」

「噴水がある公園で拾った。　汚れてるから洗おうと思ってるからその間に母さんは病院に連絡してくれないか？　拾った猫だから病気が有るか確認しないといけないし。」

「分かったわ。」

「ありがとう。」

連絡は母さんに任してまずはこいつらを洗わないとな。めっちゃち

や汚れてるし。

「ようしお前等、今から洗ってやるからな。」

「「にゃあ。」」

ここで判明したのはまずはこいつ等の色。片方が白でもう片方が黒だと言うこと。次に抵抗が少ないこと。人に慣れてるのか疲れてるのか知らないが、抵抗が少なかったから楽に洗い終えた。さて、母さんの方はどうか？

「母さん、連絡してくれた？」

「したわよ。もうすぐ家に着くわよ。」

もう！？また変なこと言ったんだろうな……。早く来てくれることに不満は無いけどな。

「あつ、来たみたいよ。早くあの子達を連れて行きなさい。」

「おう。」

それから来た人共に車に乗って病院へ向かった。

今は検査中で、俺と母さんは待機している。

「あの猫大丈夫かな～……。」

「さあ～ね。今は祈るしか無いわよ。」

「ああ。」

そうこうしてたら医者が出てきてこっちに来た。遂に結果か……。何も無ければ良いけど……。

「検査の結果ですが、何も問題は有りませんでした。ただ少し衰弱しているだけなので、暫くしたら元気になりますよ。」

「よし！」

「良かったわね。」

これで一安心だ。さて、次の問題はあいつ等をどうするかだ……。町に貼り紙でもするか知り合いに当たるか。

「母さん、あいつ等どうする？」

「家で飼えば良いじゃない。」

「家で飼うか……。それも悪くないな。よし、家で飼うか！」

「ええ、飼いましょう！」

俺と母さんの意見が一致したからあの猫は俺達が飼うことになった。でも俺猫の飼い方知らないんだよな……。

「でも母さん、猫の飼い片知ってるの？」

「詳しくは知らないけど食べ物あげて後は放し飼いで良いんじゃない？」

そ、それで良いのか……？まあ簡単だし今そうしとくか。また問題が出たらその時に何とかするか。とりあえず今日は帰るか。猫は安静の為暫くは病院に預けるらしいし。

「桐生様、猫をどうぞ。」

「有り難う。」

さ、様！？一体母さん何者だよ……。

「しかしこの猫たちには苦勞しましたよ。最初は衰弱のせいで殆ど抵抗は有りませんでしたけど、元気になったら途端に抵抗しだすんですから。まあそれだけ元気があるって事になりますけどね。今は眠っていますから静かですけどね。」

やっぱりあの時は弱っていて抵抗しなかっただけか。簡単に飼うこ

とを決めたけど……。これから苦勞しそうだ。

「母さん、この猫たちにが起きる前に帰ろう。ここで起きて逃げられたら厄介だし。」

「そうね。」

それから俺達は急いで家に帰った。

家に帰って少ししたらソファーの上に置いていた猫が起きたみたいだ。キョロキョロと辺りを見回してる用だが……。暫くして椅子に座って見ていた俺と母さんの方を見て止まった。そのまま睨めっこをしていると、2匹とも寄ってきた。何をするのかと思ったたら白いのが母さんの、黒いのが俺の膝の上で丸まりだした。

「「にゃあ〜」」

な、なんだ？逃げるのかと思ったらいきなり寄ってきて膝の上で丸まりだしたぞ。

「どうやら私達はこの子達に懐かれたようね。」

「ええ！？俺達何してないぞ！？」

「猫には分かったんじゃないの？私達の気持ちだ。まあ何にせ

よ懷かれたならそれで良いじゃない。」

「ま、まあな。」

母さんのいう通り懷かれたならそれで良いか。それじゃあまずはいつ等の名前を考えるか。

「なら母さん、こいつ等の名前はどうする?」

「名前ねえ……。白は私が考えるから黒は任せるわね。」

「分かった。」

さてどうする。名前なんて急には思い付かんぞ……。猫は猫でこっちを見たまま固まってるし。そんなに新しい名前が楽しみなのか? 兎に角名前を考えないと……。よし、これにしよう。

「母さん、俺は決まったけどそっちは?」

「私も今決まったわよ。まずは翔ちゃんの名前を聞かして。」

「俺? 俺は『カナ』だ。母さんは?」

俺は何となくカナにしたんだよね。別に意味なんて何も無いし。

「私は『コナ』よ! ちなみに意味なんて無し! 何となくよ!」

俺と同じかよ! 流石は俺の親だな……。血が繋がって無くても考えることは同レベルか……。

「なんか改めて俺と母さんが親子なのを思い知らされたよ……。」

「そう？ まあそんなことよりこれからは白いのがコナで、黒いの
がカナ。これで良いわよね？」

「ああ。後は猫たち本人だが……聞くまでも無さそうだ。」

なんか凄い嬉しそうだし。そんなにこの名前が気に入ったのか？そ
れなら考えたこっちも嬉しい限りだな。

「さて、そろそろ夕食の準備でもしますか。」

「もうそんな時間なのか。」

「今から準備するから暫く時間掛かるわよ。 それまでカナとコナ
と遊んであげたら？」

そうだな……。今特にやること無くて暇だしせっかく増えた家族
何だからいきなり放置も可哀想だしな。

「分かった。 カナとコナで遊びながら待ってる。」

「分かったわ。」

それから夕食が出来るまでずっと二匹と遊んでいた。今までは猫と
関わらなかったから知らなかったけど、猫と遊ぶのは意外に楽しく
て癒されるという新事実を発見出来て大収穫だ。これからは疲れた
心を癒して貰うために、学校が終わったら二匹と遊ぶことを決意し
た。

第6章：母さん、それは……

事件はある日の学校の帰りのHRで起こった。

「明日は身体測定の日です。数日前に渡した体操服を忘れないで下さい。」

「……………え？」

明日が……身体……測……定……？し、身体測定ってあの体の大きさを測るあの身体測定！？マジですか！？俺どうするんだよ！皆の前で測ったら一発で男ってバレるじゃん！

「咲く、一緒に帰ろうってどうしたの？何か顔が真っ青だけど……」

「え！？あつ、舞か……。いえ、大丈夫です。ちょっと体調が優れないだけです。」

「そお？無理はしちゃ駄目よ？」

「はい。それで帰るお誘いは良いですよ。綾さんが待ってるでしょうから早く行きましょう。」

「ええ。」

兎に角今は出来るだけ平静を装わないと駄目だ。こんなことで二人を心配させたく無いし、これでボロが出たら目も当てられない。兎に角家に帰るまでの我慢だ。きつと母さんなら何とかしてくれる。きつと！

「明日は身体測定か。嫌だなあ。」

「確かに嫌よねえ。」

二人共身体測定は嫌なのか。ってか女子は大体嫌ってたけど、何でそんなに嫌がるんだ？自分の体を測るだけなのに……。

「お二人共どうして身体測定が嫌なんですか？」

「どうしてって……。知りたく無いことって有るじゃない？特に体重とか。」

「体重、ですか。」

やっぱり体重か。何でそこまで体重に拘るんだ？重いか軽いかの違いだけじゃん。

「舞さんはどうして嫌なんですか？」

「私？ 私も体重ね。 あれを知るのがどうしても怖くてね……。」

舞も体重か……。女子はほぼ全員体重の事が一番の問題みたいだ。こればかりは男の俺には理解できないな。これを理解したとき、俺は女になるのかもな……。

「そう言う咲は身体測定嫌じゃないの？」

「私もあまりに楽しみでは有りませんね。」

今回は特別だから。何たって明日は俺の生死が決まるようなもんだからな……。

「やっぱり咲も嫌なんだね。 あゝ明日が来なければ良いのになあ……。」

俺も心の底から思う。明日なんて来なければどれだけ嬉しいか……。

「あつ、もうここね。 じゃあね咲。」

「ばいばいー。」

「お二人共さようなら。」

このさようならが最後のさようならにならないことを祈るよ……。

「只今ー。」

あれ？返事が無いぞ？母さんは出掛けてるのかな？せっかく大事な用があったのに……。どうしよう、今から電話するか待つか。んー
ー買い物って可能性も有るから暫く待ってみるか。

「「にゃあゝ。」」

「おっ、お前等は留守番か。　ちよつと待ってろ、着替えてきたら遊んでやるからな。」

そう言い残して俺は自分の部屋に戻った。それから着替えてメイクを落としてから、下に降りた。いつも思うのだが健全な男子高校生が家に帰ってメイク落として……。まるで変態みたいじゃないか……。でもあまり気にしない。気にしたら余計に悲しいから。

「カナ、コナ、おいで。」

俺が呼び掛けたら二匹ともすぐ寄ってきた。それから俺はカナとコナに癒されながら遊んでいたら、いつの間にか寝ていた。

「ん……。」

あれ、俺寝たのか？今何時だろう。ん？顔が動かないぞ？何でだ？俺は今横を向きながら寝てるだけの筈だが……。手を顔に持っていたら暖かい 何かに触れた。これはカナか？それともコナか？どっちにしても退けるか。

「よいしょっと、犯人はカナか……。なんでお前は俺の頭の上なんかで器用に寝てるんだよ……。そしてコナは何処に行った？って目の前で寝てるし。」

どうやらいつの間にか俺が寝て、それにつられて二匹とも寝たみたいだ。ってか時間は？そして母さんは帰って来たのか？とりあえず母さんがいるかどうかの確認をするか。

「母さんー！」

「何？」

「あつ、母さん帰ってきてたんだ。」

良かった、母さん帰ってきてたみたいだ。これでようやく頼むことができる。

「少し前にね。それで、何か用？」

「実は明日、学校で身体測定があるんだけど……。」

「それで？」

それでって……。反応薄……。

「俺が男だってことが皆にバレるじゃん！ どうすんだよ！」

「あゝそう言うことね。確かに普通に受けたらバレるわね。どうしましようかねえ。」

母さん……、全然困ってるようには見えないんだけど……。

「何とか出来ない？」

「んー出来ないことは無いわよ。そうね、これは少し手を打つ必要がありそうね。」

「マジで！？ 流石は母さん！ それで、どうするの？」

母さんなら何を仕出かすか分からないからちゃんと心の準備をしないと。……よし、大丈夫だ！

「学校に電話して、翔ちゃんの記録は家で測って提出するから明日の測定には出ませんって言うのよ。」

「そ、それだけ？」

やけに普通だな……。まあ学校にそんなことを頼むこと自体おかしいけど、何時もの母さんに比べたらかなり優しい方だ。

「ええ。早速今から電話するわ。」

「頼んだ。」

これで明日の事は安心だな。母さんがこんなことで失敗する筈無い

し。暇だから母さんの電話の会話でも聞くか。

「もしもし桜聖学院の理事長さんですか？ 私は桐生咲の母です。

この度は少しお願いがあつて電話させて頂きました。明日の身体測定に娘は出ず、家で測つて記録を提出すると言う形をとりたいのですが宜しいですか？」

随分ストレートに頼んでるな。普通ならこんな風をお願いしても通るはずが無いんだが、母さんだから絶対これで終わるはずが無いんだよな……。理事長さん可哀想に。

「え？ そんなのは無理？ どうしてですか？ ちゃんと記録は誤魔化さずに書きますよ。え？ そんな保証は無い上に一人の生徒だけを特別扱いはできない？ そうですか……。では少しお話でませんか？ つい最近とても面白いことがあつたんですよ。

これは昨日の夜9時ぐらいでしたか、町を歩いていたらある人物が女の人と腕を組ながら歩いていましたよ。これだけならなんとも無いのですが、実はこの人物は私の知ってる人でして、しかも結婚してるんですよ！ これどう思いますか？ やはり直ぐに妻に連絡するべきだと思いませんか？ え？ さっきの頼みは許可するか？ らその事は誰にも言わないでくれ？ 別にあなたのことを言った訳じゃ無いですけど許可してくれて有難うございます。それでは。」

どうやら終わったみたいだな。ってかさっきの会話の後半は誰がどう見ても脅迫だろ……。でも理事長さんも何やってんだろ……。まあオレには関係無いから別に良いけど不倫は人としてどうかと思うぞ……。

「翔ちゃん、許可貰ったわよー。」

「ありがと母さん。これで心配の種が一つ減ったよ……。」

本当に良かった。これで今回はバレル心配は無くなったな。って言うってもこれから何があるか分からないから安心はできないけど……。はあ、面倒だ……。でも面倒なことって大概是大事な事だからやらなきゃ駄目なんだけど……。

「それじゃあ翔ちゃん。早速測りましょうか♪」

「え？　今から？　ってか何でそんなに楽しそうなんだよ。」

「だって早めに終わらした方が後が楽でしょう？　それに楽しみじゃないわよ♪」

「まあ、な。　母さんの言う通りだし、サツさと終わらすか。」

早く終わらして心配事を減らすのも良いな。そして母さんは絶対に楽しみにしているな。何が楽しみなのか知らないけど……。それから母さんにあれこれ調べられ、身心共に疲れたところで晩飯を食べて、今日は終わった。

第7章..もうテストか……

遂にこの時がやって来た。

身体測定的时间！俺は先に先生に提出すれば良いんだけど、周りの視線が凄そう……。『なんで貴方だけ家で調べてるの？』って言う視線にさらされるのか……。別に視線自体は気にしないのだが、俺はここでは注目される訳にはいかないんだよなあ……。でもここを出さなかったらバレてしまうから腹をくくるしか無いか。

「もうすぐ身体測定を始めます。先ずは体操服に着替えて、体育館に集合して下さい。」

よし、言うなら今しかない！

「あの、先生。」

「どうしました桐生さん。何か問題でも有りますか？」

「いえ、これを先生に渡したくて。」

そう言って先生に身体測定のプリントと、理事長さんの許可書を渡した。

「これは……。分かりました。確かに受け取りました。それでは桐生さんはここで自習をして待っていて下さい。」

「はい、分かりました。」

ふう、とりあえずこれで受けなくて済む。周りの視線は予想してた

通りだから気にならないが、注目されるのは不味いな……。まあ兎に角今は何もせず、静かに時間が過ぎるのを待つか。

「それでは皆さん、着替えて移動して下さい。」

「「はい。」」

返事と共に皆が着替えを始めた。……。ちょっと待て。もしかしてここで着替えるのか？　っと言うことは……………。

「あれ？　咲ちゃんどうしたの？　顔が真っ赤だよ？」

「い、いえ！　何でもありません！　気にしないで早く着替えて下さい！」

「う、うん。」

綾は俺が必死に言うものだから戸惑いながらも言う通りにしてくれた。俺は今非常に目のやり所に困っている。俺は男で周りにはみんな女子。しかも着替えてるから下着が見えたり見えなかったり……。兎に角顔を伏せる！　そして皆が着替え終わるのを待つ！　頼むから早く終わってくれ！

「咲どうした？　顔を伏せて。」

「ち、ちょっと今日は寝不足でしたので少し睡眠を取ろうかと。」
次は舞がやって来た。気にかけてくれるのは嬉しいが今は全然嬉しくない！

「ふ〜ん。でも話するときぐらいは顔を上げないさいよね。」

「は、早く寝たいので出来るだけ目を瞑ってるのです。」

「ふ〜ん。そこまで言うなら邪魔しちゃ悪いから私は行くね。」

「は、はい。行ってらっしゃい。」

「うん。」

舞は行ったか。

もう少しの辛抱だ。

頑張ろう！そのまま数分したら物音が聞こえなくなったのでそおーっと顔を上げてみると……良かった、誰もいない。ここでお約束として誰か一人残ってたりするのかと思ってヒヤヒヤしたぜ。でも無事やり過ごせたみたいだな。さて、先生も言ってたことだし予習でもするか。別にしなくても分かるけど。でもその前に少しだけ寝ようかな。昨日の夜は意味無く緊張してたから良く眠れなかったし。それじゃお休み…。

「さ……ん……て。」

ん？話し声が聞こえたけど誰かいるのか？

「咲ちゃん起きて。」

俺を呼んでるのか。しかもこの呼び方ってことは綾か。

「ん……。」

「あつ、ようやく起きた？」

「はい、お陰様で起きました。それで、何か用事ですか？」

「うん、もう皆帰ってきてるからそろそろ先生が来るだろうと思つて起こしたの。」

「そうなんですか。態々有難うございます。」

どうやらもう皆帰ってきたみたいだな。

しかも既に制服を着ていると言うことは着替えも終わったと言うことか。

良かった……。

また着替えを見せられたらたまったもんじゃないぜ。それにしても俺は皆が行ってから帰ってくるまでの間ずっと寝てたってことになるのか？ 時間にしたら1時間ちよいか……。俺ってそんなに疲れたのか……。まあ寝てたお陰で着替えを見なくて済んだからよしとするか。とりあえずまだ少し時間は有るだろうから綾と話でもするか。

「綾さん、身体測定はどうでしたか？」

「うっ。 あ、あんまり良くなかった……。」

「そんなになんですか？」

「前よりも0.5キロも太ってた……。」

0.5って……。そんなのどうでも良いだろ。

「それぐらいでしたらそんなに問題は無いんじゃないですか？」

「確かに大袈裟に言うことでも無いけど……。それでもちよつとでも体重が増えたのは問題なの！ 私達女の子は体重の増えた量よりも体重が増えたことに問題があるの！ 咲ちゃんだってそう思うでしょ？」

俺は男だから分からないけどね。でもそんなことは死んでも言わない。

「まあわかりますけど……。」

「ならあんなこと言わないで！ 分かった！？」

「は、はい。分かりました。」

「宜しい。それで咲ちゃんはなんで受けなかったの？」

「私ですか？ 私は」

「皆さん、静かにして下さい。」

言おうとしたら先生の声が聞こえた。先生いつの間に入ってきたの……。

「先生が入らしたので、この話しは後でしましょう。」

「うん。」

とりあえず今は先生の話を聞くのに集中することにした。普段ならこんなに集中しては聞かないけどこの学院なら話しは別だ。先生の連絡を聞き損ねてバレたとなったら目も当てられない。

「皆さん身体測定は終わったようですね。今日はもう授業も無いのでこれで終わりですが、その前に連絡事項を言います。来週には実力テストがあります。テストの時に苦労しないように、早い内から勉強を始めておきましょう。連絡事項はそれだけです。皆さん、今日も1日お疲れさまでした。」

もうテストの時期か。何だかあつという間だったなあ。

最近は毎日が無駄に疲れるせいで時間が短く感じるな……。これは良いことなのか悪いことなのか微妙なところだ。

「咲ちゃん帰ろう。」

「あつ、はい。」

綾に誘われていつも通り3人で帰っていた。

「ううゝ、テストなんて嫌だよお……。」「

「私も好きじゃ無いわね。綾程では無いけど。」

「お二人ともそんなに嫌いなんですか？」

別に俺だって好きでは無いが、別に嫌いでもない。テストとかで特

に困ったことなんて無いしなあ。

「嫌に決まってるじゃない！ あれは拷問よ拷問！ 何時間も分からない問題を無理矢理解かせようとするなんて拷問以外には考えられない！」

「まあ綾程では無いけど嫌いね。分からない問題を解こうとすると苛々してくるし。」

「舞は勉強出来るから良いじゃない！ 私は全然なのよ！？」

「そ、そんなこと無いわよ。」

「舞さんは成績が良いのですか？」

綾は成績が悪くて舞は成績が良いのか？ まあ雰囲気で何となくは理解出来るけど……。

「舞はね、毎回テストで上位10位以内には絶対いるの。凄いよねえ。」

へえ、上位10位以内か。凄いじゃん。

「舞さんは凄いんですね。綾さんはどうなんですか？」

何となく聞かなくても分かるけど……。

「わ、私は、ほら、ね。わ、私のことなんかよりも咲ちゃんは！？」

言えないほど酷いのか……。まあこれ以上は聞かないでおくか。それより俺か……。どうしよう、普段なら毎回1位を取ってるって言けど、この学院では目立たない為にも成績は抑えるつもりでいるからな……。まあここはこれからの為にもちゃんと答えるか。嘘を。

「私はいつも平均点を前後してますね。」

これぐらいが無難な答えだろ。正直平均点ぐらいの点数で話題を盛り上げるなんて絶対無理だろうしな。

「咲は平均点を取れてるってことはそこそこ出来るってことね。これで問題なのは綾だけね。」

「ううゝ。な、何とかなるもん。」

「勉強をしませんでしたら何とかなるものもなくなりますよ?」

「うっ……。そ、そもそも勉強なんか生きていくのには必要無いじゃん!　なんでそんな必死にやるの!?」

勉強出来ない奴の常套句だな。ここまで言うってことは相当酷いみたいだな……。どうする、勉強を見てやっても良いが俺の実力は平均点並みと言うことにしている上に、勉強を教えるってことは学校が無い日にもこの格好(女装)をしなければならんだよな……。これは綾には悪いが頑張っって貰うとするか。

「必死にやるのは成績の為よ。まあこれ以上この話をするのは綾には可哀想だからこの辺で止めるわ。」

「そうですね、それが良いと思います。」

「そ、そうだよ！ 勉強の話なんかよりもっと楽しい話しようよ！」
この話しは綾が振ってきた筈なんだが……。まあ深くは突っ込まないでおくか。それからは他愛もない話をしてそれぞれ家に帰った。

「なあ母さん。」

「なに？」

「今度実力テストがあるんだけど、別に真面目にやらなくても良いよな？」

一応母さんに聞いたくことにした。真面目にやらないってことは当然点数が下がり、成績が悪くなるから親としては見過ごせないかもしれないしな。

「んー、あまりに酷い点数じゃ無ければ良いわよ。 どれぐらいを目指してるの？」

やっぱり許可してくれたか。母さんはそんなに成績に煩い人ではないし、俺が出来るのは知ってるしな。

「目標は平均点ぐらいかな。 テストを見て適当に予想を付けてその点数を取る。」

これが俺のやることだ。平均点って言っても分かるのはテスト返却の時だから、予想は出来るだけずれないようにしないといけないのが難しいけど……。

「そお、まあ翔ちゃんなら簡単でしょう。頑張ってね！」

「ああ。」

それから晩飯を食べて、風呂にも入り後は寝るだけになったけど、やっぱり寝るには早い時間だ。

そうだな、測定の時間に寝てしまったから今から少し勉強するか。……あつ、そう言えば綾に何で俺だけ受けなかったのかを教えるの忘れてたな。まあそんな大事なことでは無いしまった今度教えるか。それから勉強してたら段々といい感じに眠気が襲ってきたから、この時を逃さない為にもさっさと寝ることにした。

第8章：勉強会？

「ねえ、3人で勉強会しない？」

「え？」

いきなり舞が変なことを言い出したぞ。

「あの、どうして勉強会をするんですか？」

「そうよ！ 勉強なんて授業中にだけやれば良いのよ！」

綾よ、だからお前は成績が伸びないし悪いんだ……。

「だいたい、舞ちゃんに咲ちゃんは勉強しなくても良いじゃない。」

「いや、私達だって勉強せずに点数取れるわけ無いじゃない……。」

まあ俺は高校レベルなら勉強しなくても満点ぐらい取れるけど……。

「これはね、綾のためにやるの。」

「私のため？」

「そ。綾の事だからどうせ勉強せずにテストに挑んで、点数悪くて親に怒られた上に学院側から課題を出されて、それが終わらなくて私に泣き付くのがオチでしょ？」

「うっ……。」

……そんなことに成るのか。そしてそこまで予想が出来るってことは前にもこんな展開が有ったんだな……。しかも複数。何か、お疲れ様って感じたな。

「で、でも何で急にそんなこと言い出すの？　今までは一回も言わなかったじゃない。」

「今まではそこまでやる必要は無いと思ってたからよ。」

「こ、今回も必要無いよ!」

「そうも言ってもらえないわ。今回のテストは結構重要なよ。」

「え？　それってどう言うこと?」

今回のテストは大事?……もしかしてあれか?

「……………クラス?」

「そうよ咲、今回のテストはクラス決めが関係してるの。」

「クラス決め?」

綾、お前は学院のパンフレットを見てないのか?

「綾……、あのね、この学院では成績順にクラスが分けられるの。この学院は受験して来た人もいれば、私達のようにエスカレーター式で来た人もいて実力がバラバラなの。だからそれを次のテストの点数でクラスを成績順にして、授業をやり易くするの。」

「そ、そうなんだ……。」

「それで、このままだと綾は最下位辺りのクラス、咲は真ん中ぐらいいになって、私は上位と皆バラバラになっちゃうの。それを防ぐ為に勉強会をしようと言ってるの。」

成る程な。確かに、折角仲良くなったのにいきなりクラスが変わったら会いづらくなるしな。

「そうなる今回は私も勉強しないとヤバイって事ね……。」

「そうよ。だから勉強会をしましょう。異論は？」

「私は無いけど。」

「私も有りません。」

「オッケー、じゃあ場所はどうしよつか……」

場所は大事だ。この2人というってことは俺は女装してるわけで、それを昔のクラスメートにバレたら終わりだから、人が集まる場所は嫌だ。

「この学院はどうでしょうか？」

「それは嫌！　いくらクラス替えの為とはいえ、授業でも無いのに学院で勉強なんて絶対嫌！」

「それに学院は休日は開いてないから無理よ。」

「え？ では部活の方達はどうしてるんですか？」

休日に学院が閉まると部活が出来ないじゃないか。

「文化部は休日は休み。運動部にはそれぞれ専用の場所が違う所に有るから、そこに行ってるはずよ。」

「へえ。」

それは知らなかった。だとすると一番安全な学院は候補から消されると……。しかしこれは厄介な事になったな。学院以外に知り合いが集まらない場所なんて有るのか？ 町中とか絶対駄目。ついでに俺の家も駄目。もしも部屋に入られたら一発で男だってバレるし……。

「うーん、どうしようか……。」

「私達の家は流石に無理だもんねー。」

「そうよねー。」

「「うーん。」」

しかし以外な展開になったな。まさか場所で困るとは。これじゃあやる以前の問題だ。

「……………こうなったらダメ元でパパに頼んでみようかな。」

「綾のお父様に？」

「うん。無理だとは思うけど聞いてみる。」

綾の父さんか…。どんな人なのかなあ。テレビに出てることぐらいあると思うけど、何故か俺は見たことが無いな…。

「なら場所は綾に任せて、予定は私と咲で決めるわ。」

「分かりました。」

「うん、お願いね舞ちゃん。」

とにかくこれで少しは希望が見えてきたな。まあダメ元って言うてるからあまり期待はしないほうが良いのだろうけど、それでもつい期待をしてしまうな。

「ならこの話の続きは明日にしましょ。もう着いたわ。」

着いたと言うのは何時もの分かれ道で、分かれ道にいるというのは今が帰りだからである。

「それじゃまた明日ね、咲。」

「またね、咲ちゃん。」

「はい、二人ともさようなら。」

「母さん、近々勉強会するから。」

とりあえず今日のことを母さんに伝えることにした。早いうちに伝えとかないと母さん煩いからなあ……。

「勉強会？ 翔ちゃんそんなの必要無いでしょ。」

「俺じゃなくて綾が必要なの。」

俺が必要な訳無いだろ……。

「綾？ ああお友達の事ね。でも何でいきなり勉強会を？ 綾ちゃんはそのな成績やバイの？」

会っても無い相手に名前でちゃん付けか……。流石は母さんだ。何が流石かは知らないけど。

「結構ヤバいらしい。しかも今回の実力テストは、今後のクラス替えに影響するテストだから、出来るだけ皆の点数を会わせたいんだ。」

「成る程ね。それで成績の悪い綾ちゃんの為に勉強会をするのね。」

「そう言うこと。まだ詳しいことは決まっていから決まったら教える。」

「分かったわ。あら？ 確かお友達ってもう一人いなかった？」

「舞のことか？」

「そうそう舞ちゃんよ。確か二人とも財閥の娘だったわよね？」

「ああ。」

「そっかあ、何で忘れてたんだろう……。」

母さんが忘れるなんて珍しいな。まあそんなこともあるか。

「それで、舞がどうかしたのか？」

「あつ、忘れるところだったわ。舞ちゃんって成績良いの？」

「舞は常に上位だったらしいぞ。だから問題は無い筈。」

「てことは綾ちゃんだけがピンチなのね……。まあいざとなったら二人が会わせれば良いんじゃない？」

「まあな。」

確かにそれもありだな。俺は勉強会で綾の実力を見極めて、それに合わせたら良いし、舞は長い付き合いだから何となく分かるだろうし。まっ、いざとなったら舞と相談するか。

「オッケー貰ったよ！」

学院に着くなりいきなり綾が言ってきた。

「ホントですか？」

それがホントならかなりの進歩だ。後は予定を決めたら終わりだし。

「うん！ 何か勉強会するって言ったら即答してくれたの。」

………親御さんは綾には勉強して欲しいと本気で思ってるみたいだな。

「それでね、土日ならどっちでも良いらしいよ。 何なら二日連続でもとかも言ってた。」

二日連続はまだ分からないとして、土日なら時間もたっぷりあるから十分出来そうだな。

「分かりました。 では、あとは舞さんと話し合って決めます。」

「うん。」

さて、舞は何処かな？ と自分の席に座ってるみたいだな。早速話に行くか。

「舞さん。」

「咲？　どうしたの？」

「綾さんからオッケーを貰ったと聞きましたので、早速舞さんと予定について相談しようかと。」

「咲も聞いたのね。　ならまずは何時にする？　個人的には午前中からやりたいのだけど……。」

「私は構いませんよ。　でも何で午前中から？」

「綾のことだからきつと休憩を何回も挟んで、中々進まないと思うから時間は出来るだけ多く欲しいの。」

成る程な。綾みたいに勉強に慣れてないとすぐにダウンしそうだな。

「分かりました。　では時間は午前からと言うことで。　では次日にちですが、今週の土日しかやる日は無いので土曜日にしませんか？　それで、土曜日の進行具合を見て日曜日をどうするかは決めるように思うのですが。」

「ええ、それで良いわよ。」

「後はどの様な形でやって行くかですね……。」

「とりあえず綾が苦手としてる教科からやっていくとして。　咲は何の教科が得意なの？」

得意な教科か……。正直全部分かるから教科に得手不得手が無いんだよな……。まあここは適当にそれなりに好きな教科を言っとくか。

「強いて言うなら私は数学が得意です。」

「数学かぁ。それなら私とは被ってないから良かったわ。流石に私一人で教えるのは疲れるしね。」

「そうですね、私で役に立つなら頑張ります。それで、綾さんが苦手な教科って何なんですか？」

「綾は……基本全部駄目。でも得に酷いのは英語ね。」

英語か……。まあ英語が苦手な人は多いから綾もその一人だろう。あれは覚えるだけで良いから楽っちゃ楽なんだけどなぁ。でも覚える量が多いから苦戦するんだろなぁ。俺はすぐ覚えたから得に問題なかったけど。

「ではまず英語からやって、次に数学、次に……って感じで良いですか？」

「そうね。それで行きましょう。」

「分かりました。」

よし、これで予定は決まったな。後は帰って母さんに報告をして終わりだな。その前に授業があるけどな。さて、今日も一日適当に頑張るか。

学院から帰ってきた俺は、母さんが帰ってくるのをカナとコナで遊びながら待っている。それにしても今日は珍しく遅いな……。

「ただいま。」

「あっ、母さんお帰り。今日は母さんに伝えたいことがあるだよ。」

「伝えたいこと？　もしかして勉強会の日時が決まったの？」

「ああ。今週の土曜日の午前中から。進行具合を見て日曜日やるかを決めることになった。」

「あらそう。なら昼と夜は要らないのね？」

そう言えば飯はどうするんだ……？　まあ昼は適当に何とかなるとして夜は……。まあ一応金を用意しとくか。

「昼は適当に食べるけど夜は分からないからその時にメールする。」

「分かったわ。」

これで報告も終り。後は適当にこいつらと遊んどくか。それから暫く遊んだ後、いつも通りに過ごして時間が過ぎていった。

第9章：綾の家へ向けて出発！

そんなこんなで時間が過ぎていき、今日は勉強会一日目だ。まあ二日目があるかは分からないがある可能性は高そうだ……。

「翔ちゃん準備できた？」

「昨日の内に終わってる。女装も不本意ながら終わってる。後
は出る時間まで待つだけ。」

確か朝の9時に何時も別れるところに行けば良いんだったな。今は8時か。あそこまでは30分もあれば着くから、もう暫くはゆっくりできるな。ゆっくりと言ってもやること無いけど……。

「今日翔ちゃんって綾ちゃんの家に行くんでしょ？ 良く入るのOKしてくれたわね。」

「その辺りは俺も詳しくは無いが、なんか親に勉強会をするって言ったら即答だったらしい。」

「親御さんも勉強して欲しいと思ってるけど強く言えなくて困ったのかしらね？」

「たぶんな。」

その可能性は十分にあり得る。
まあ財閥の娘なんだから色々と習い事はやってたのかもしれないが、勉強だけは伸びなくて困ってたのもあり得るかもな。何にせよ俺は綾に教えつつ綾の実力を把握して、テストに備えければ。あつ、

後俺自信の實力も上手く偽らないといけなかったな。……やらないといけないこと多いなオイ。まあどれも難しいことじゃないから気にしないけど。

「翔ちゃん、そろそろ出ないと危ないかもよ？」

「うわっ、やべっ！ 母さんいつてきます！」

「はい、いつてらっしゃい。」

母さんと適当に話してたら出る予定の時間を5分程オーバーしてた。まあ5分なら走って十分カバーできる時間だから問題ないか。とにかく急ぐか。

「あっ、咲ちゃん！ こっち！」

目的地に着いたら既に二人とも揃っていて、綾が手をふっている。約束の時間まで残り1分か……。結構危なかったな。まあ間に合えば何でも良いか。

「おはよう、咲ちゃん。」

「おはよう、咲。」

「お二人ともおはようございますが。 お二人とも早いですね。」

「そう？　5分前に着くのは常識だよ？」

まさか綾にそんな事を言われるとは……。ちよつとショックだ……。

「まあ私と綾は、家庭の事でよく出掛ける事があって、その時は相手を待たすわけにもいかないから、約束の時間より早く着くのが当たり前になってるの。だから綾でも約束の時間には遅れたりはないの。」

「ちよつと！　私でもって何よー！」

「そのままの意味よ。普段の綾を見てると、皆綾は遅刻してくると思うわよ。現に咲だって驚いてるみたいだし。」

「そ、そうなの咲ちゃん！？」

「え、い、いえ、そんなことは……。」

思ってたかったと言ったら嘘になる。正直綾は遅刻してくると思ってたしな……。

「ううゝ、咲ちゃんまで……。」

「はいはい、しよぼくれて無いで早く行くわよ。　時間は無限じゃ無いんだからね。」

「あ、うん。　じゃあ行こっか。」

「はい。」

遂に綾の家に向けて出発か。綾の家ってどんなのかなあ。やっぱりデカイのかな？金持ちだし、家はデカくて当然か。なら家にはメイドもいるのか？あと執事とかもいそうだな。……これは行くのが凄く楽しみななってきたぞ。あゝ早く着かないかなあ。

俺達は今バスに乗っている。しかし今このバスには俺達以外は誰も乗ってない。何故だ？乗った時は満席だったのに、進むに連れ人がどんどん降りていって、今は俺達3人しかない。何故だ？

「舞さん。何故私達以外に誰も乗ってらっしゃらないんですか？」

「あつ、それはね、私達が降りる駅はお金持ちしか住んでいない場所だね、それが次の駅なの。」

なるほど。それで他の人がいないのか。しかも金持ちは大体は自分の家の車を使うことが多いだろうから、余計に使う人が減るんだろうな。

「もうすぐ着くから降りる準備しといてね。」

「はい。」

ようやく降りるのか。かれこれ1時間近く乗ってたような……。

「着いたよ。 さっ、降りよう咲ちゃん。」

「分かりました。」

お金を払って降りてみたら、目の前にはバカデカイ家家家……。なんだここは。ホントに俺の住んでる町なのか？見渡す限り無駄にデカイ家しかないぞ。

「どうしたの、咲ちゃん？ そんな所でブーツとしてたら置いてっ
ちやうよく。」

こんなの目にしたら誰だってブーツとするわ。

二人は見慣れてても俺は始めて見たんだよ。

しかもむちゃくちゃデカイ家だぞ？これはもう小さな城に近いぞ……。

っと、こんな事ばかり考えてたら置いていかれるな。

早く追いかけないと。

ってあれ？二人がいないぞ？まさかホントに置いて行かれたのか？もしそうならこれは困ったぞ……。

俺は綾の家がどの辺にあるか聞いてないし、この辺の地理は皆無だからな。

さて、どうするか。この場を動かず、二人が俺がいないのに気づいて戻ってくるのを待つか、迷子になるのを覚悟して動くか。んー、個人的には動きたいのは山々だが、そんなこととして勉強の時間を取るのも勿体無いし……。よし、待つか。ここの探検はまた今度一人で来たときにするか。帰れなくなったら終わりだけど。

「ちよっとそこの貴方。」

ん？後ろから声がしたぞ。俺以外にも誰がいるのか？

「わ、私、ですか？」

「そう、貴方よ。」

後ろを振り向いて見るとそこには女の人がいた。髪の毛がツインテールだ。でもドリルみたいにはなっていない。俺の想像では金持ち
はドリルみたいなグルグルの髪型何だけど、未だに見たこと無いな
……。

俺の想像は古いのか？

「貴方みたいな一般庶民が、何故この場所にいるのかしら？」

「いや悪いのか？ つか何故俺が一般庶民と分かった。」

「あの、いたら駄目ですか？」

「駄目とは言わないけど、一般庶民がここにいたら怪しいわよ。」

まあ確かに怪しいな。普段俺みたいな人が来ない分かなり怪しいよな。

「そうですか……。あと、何で私が一般庶民だとわかったんですか？」

「貴方から庶民オーラが出てからよ。」

どんなオーラだ。俺はてっきりあの二人みたいな能力を、この人も持ってるのかと思ったぜ……。でもそうでは無いみたいだな。これなら少しは安心かな。

「でも貴方から、普通の庶民とは少し違うような感じがするわね……。」

「……やべえええ!! 流石に俺が男だとはバレてないみたいだけど、このままではバレるのは時間の問題か!?!? つかお嬢様は皆こんな能力を持つてるのか!?!」

「そ、そそんなことあるはず無いじゃないですか!」

「いえ、確かに貴方からは何か違和感を感じるのですが……、まあいいわ。」

よ、よかったああ。相手が興味を無くしてくれて助かったよ……。お陰で男だとバレなくて済んだし。

「あからさまにホッとするのと物凄く怪しいのだけど、それはもういいわ。それより何で貴方はここのいるのかしら?」

そう言えばまだ答えて無かったな。ん? この人はこの辺に住んでるんだよな? あんな車を持ってるんだから。なら綾の家も分かるかもしれないな。ついでに聞いてみるか。

「あの、私、波井さんと鈴堂さんの友達で、今日は波井さんの家にお邪魔する予定でしたが、はぐれてしまって……。」

「ふーん、なるほど。」

「それで、一つお願いがあるのですが……。」

「家まで送ってってことね。」

「送って下さらなくても、道だけ教えてくれたら大丈夫ですよ。」

いくらなんでも送って貰うのはこの人に迷惑だしな。道さえ教えてくれたら迷うことは無いだろう。

「送ってあげるわよ。丁度今帰ってる途中で、帰り道の途中にある人の家があるから。」

「そうなんですか？ ならお言葉に甘えさせて貰います。」

「なら早く行きましょうか。私も早く帰りたいし。」

「分かりました。」

女の人に促されて、車の後ろの席に乗った。うわっ、何だよこのイス。めっちゃくちゃ柔らかいし……。しかも中が広い……。家の車とは大違いだな。当たり前だけど。

「そう言えばまだお互いに自己紹介して無かったわね。私は神木^{かみき}エレナよ。貴方は？」

「私は桐生咲です。」

「咲ね、よろしく。」

「よろしくお願いします。」

自己紹介の後は得に何も話さず静かに車の中で着くのを待っていた。

「着いたわ。　　と言っても近くにだけどね。」

「あっ、ありがとうございます。」

お礼を言って車を降りた。

「それじゃ、私は行くわね。」

「あっ、はい。　　送って下さってありがとうございました。」

「気にしないでいいわ。　　それじゃあね。」

そう言って神木さんは去っていった。結構親切な人だったなあ。金持ちってのは我が儘な人ばかりだと思ってたけど、これは考えを改めるべきかな。

「咲!」

「咲ちゃん!」

改めようかと考えていたら前から見知った二人が走ってきた。

「もう！ 何処行ってたの！？」

「ホント、心配させて……。」

「すみません……。ボーツとしてたらいつの間にか見失ってしま
つて。」

今回は完全に俺のミスだったな……。初めて見たと言っても二人を
見失うまでボーツとしてるなんて。

「はあ。でも咲ちゃん、よくこの場所が分かったね。私前
に教えたっけ？」

「いえ、偶々通り掛かった人に送って貰ったのです。」

「へえ、誰に送って貰ったの？」

「神木さんって人に送って貰いました。」

「神木？ 私知らない……。舞ちゃん知ってる？」

「神木って言ったら私達程では無いけど、かなりの金持ちだったは
ずよ。でも送って貰えるなんて、咲は運が良かったわね。」

「はい。神木さんが親切な方で助かりました。」

「そうね。さっ、随分時間取っちゃったから、早く綾の家に行っ
て勉強会を始めましょうか。」

「はい。」

「うん……。」

綾が凄い面倒そうな返事をしながら綾の家に向かった。

第10章：ここはどの国だ……？

ちよつと問題はあつたがようやく綾の家に着いた。そして俺は再び啞然とした。この家やべえ……。デカイと言うのは予測していたけどさ、まさかここまで大きいとは……。これは城か？どっかの国の王さまが住んでるような城か何かなのか？どう見ても他の家とはサイズが違うぞ……。

「咲ちゃん！ そんな所で立ってないで早く行こ。」

「あつ、はい。」

もうこれ以上は時間を無駄にする訳にはいかないしな。

「それじゃ早速私の部屋に行こっか。」

「え？ 綾さんの部屋でやるんですか？」

「うん。だってあそこが一番ゆっくり出来るからね。」

マジで？それはちよつと困るな……。俺は皆には女で通してるけど、実際は男だから女の子の部屋に入るのは少し気が引けるな……。

「何か問題でもあるの？」

「いえ、別にありませんけど……。」

実際は大有りだけどな。

「じゃあ良いでしょ。 あっ、私お茶の用意を取りに行ってくるから、二人は先に部屋に行ってて。」

「分かったわ。」

「はい。」

そう言って綾は何処かに行った。何処かって言っても台所辺りだろうけど。

「じゃあ行くわよ。」

「はい。」

舞にの後に着いて行きながら、この城とも言える家に入って行った。

何だここは……。外から見ても家には見えないサイズをしてたが、中も中で凄いな。廊下がめっちゃ広くて、扉がズラリと並んでるぞ……。しかも廊下の先に壁が見えないし……。どんだけ広くて長い廊下なんだ。

「咲、こっちよ。」

「あっ、はい。」

舞が行こうとしてるのは、これまた終わりが見えない廊下。一体どれが綾の部屋なんだ……？

「あの、舞さんは何処に綾さんの部屋があるのか分かるのですか？」

「そりゃ何回も来てるから分かるわよ。流石に最初の頃は迷ったけどね。」

「そうですか、安心しました。」

良かった、当たり前だけど舞は部屋の場所が分かるみたいだ。知ってるとは思ってたけど、このあり得ない数の扉を見たら嫌でも不安になるぞ……。

「あっ、でもはぐれないでね。迷う可能性があるから。」

「………分かりました。絶対にはぐれません。」

「よろしくね。」

他人の家で迷子になるってどうなんだ……。いや、他人とか言う前に家に迷子と言う単語は可笑しいだろ。でもこのサイズの家だからあり得そうで怖いな……。よし、絶対にはぐれ無いようにしよう。

はぐれないよう心に違って、10分近く歩いたら舞が止まった。ようやく着いたみたいだ。しかし玄関から自分の部屋まで10分って……。面倒すぎるだろ。

「着いたわ。 さっ、入って。」

「お邪魔します。」

舞が入るよう促してくれたから、先に部屋に入った。入ってまず最初に目に入ったのはぬいぐるみ。その後見回しても見つかるのはぬいぐるみ。部屋中にぬいぐるみが置いてあるみたいだ。

「この部屋凄いでしょ。」

「はい、凄いですね……。」

女の子らしいっちゃらしいけど、それでもこの数は……。

「舞さんの部屋もこんな感じなのですか？」

もしそうなら俺の知識が可笑しい事になるのか？

「私の部屋はもっと普通よ。 所々にぬいぐるみが置いてあるくらいよ。」

「そうですか。 それを聞いてホッと思いました。」

「こんな部屋は綾ぐらいだと思うわ。 咲の部屋はどんな感じなの？」

俺の部屋？基本的に部屋でやることって、小説などを読む時と、勉強する時以外は使わないからなあ。あつ、後寝するときも使うのな。

「私はあまり部屋に籠らないので、最低限の物ぐらいしかありませんね。」

「そうなの？ 女の小でそれは、今時にしては珍しくない？」

「そうなのですか？ その辺りは良く分かりません……。」

ってか女の子の部屋に入ったのが、今回が初めてだからそんなの分かるはずが無い。

「私もその辺はよく分からないけどね。兎に角、入口で立ち話なんてしてないで座るわよ。真ん中にあるテーブルの周りにでも座れば良いでしょ。」

「分かりました。」

言われたテーブルの奥に座った。それから暫く無言で待っていたら、誰かが部屋に入ってきた。

「二人ともいる？」

「いるわよ。」

「良かったあ、咲ちゃん迷子にならなかったんだね。」

「はい、舞さんにしっかり着いて行ったので、無事に着きました。」

「綾、早くこっちに来て勉強始めるわよ。」

「はい。お茶の用意はどうする？」

「各自が飲みたくなったら入れるって事でいいでしょう？」

「私は良いわよ。咲ちゃんは？」

「私もそれで構いません。」

お茶ぐらい自分で入れれるし、今は何か飲みたい訳でも無いしな。

「じゃあ、勉強会を始めるわよ。」

「おおー！」

「はい。」

こうして、勉強会が始まった。

「んー舞ちゃん、ここはどうやるの？」

「また？　ってここはさっき教えた公文を使えば良いのよ。」

「どうやって？」

「これをこうして、こっちをこうしたら出来上がり。」

「おおー、流石舞ちゃん！」

「綾、あんた考えるの放棄してるでしょ？」

「そ、そんなことは無いよ？」

「じゃあなんでさっきから聞いてばっかで全然進んでないのかしら？」

そうなのだ。綾はさっきから何回も聞いているのだ。別に聞くのが多いのは別に構わない。けど全てと言って言い程、問題を舞に聞いている。少しは考えないと、教えてもらってあまり意味が無いぞ…。

「それはほら、あれよ、問題が難しいからよ。」

「さっきから言ってることを使えば簡単に解けるわよ。」

「そんなこと言ったって、どれを使えば良いか分かんないもん……。」「

「それ考えるのが勉強でしょ。」

「そうだけど……。　ううー、き、休憩よ！」

早！まだ始めて20分ぐらしか経ってないぞ。どんだけ集中力無いんだよ……。

「はいはい、綾は休憩してなさい。私はまだやるから。」

「してくる！」

そう言ってお茶の準備を始めた。しかも凄い嬉しそうに。そんなに勉強が嫌だったのか。

「でも思ってたよりペースが遅いわね……。」

「そうですねえ。私もまさかここまで進行が遅いとは思わなかったです。」

これは予想外だった。綾が20分間で解いた問題は3問。しかも全部聞いている。ちなみに俺は、今日のために買った問題集を半分ぐらいまで終わらした。舞も似たようなペースである。まあ俺と舞は早いけど、それでも綾は遅すぎる。これは何か対策を考えるべきか？

「……このまま英語を続けても進展は無さそうだから、違う科目をやらせてみる。」

「そう、ですね。では次は私が数学を教えてください。」

「よろしくね。」

さて、次は俺の出番か。俺の学力をバレないようにかつ、分かりやすく教えないとな。ついでに綾の実力を見極めないといけないし。

……凄く面倒だな。まあやると言っただけにはやるしかないか。

「綾さん、次は私が数学を教えますね。」

「咲ちゃんが？ うん、分かった。」

「では、休憩が終わりましたら教えてくださいね。」

「はい。」

さて、俺も綾の休憩が終わるまで休憩するか。

「綾さん、お茶を貰いますね。」

「いいよ。」

綾の許可も貰ったしお茶を入れるとするか。別に許可を取る必要は無いだろうけど。

「咲ちゃんってお茶上手に入れるね。」

「そうですか？」

「うん、見てて凄い上手に入れてるもん。」

「自分ではよく分かりませんが、ありがとうございます。」

お茶の入れ方とか適当なだけだな。適当と言うか、ただ母さんが何時も入れてる所を見てるから、その通りにやってるだけなんだよな。それで上手いって言うことは、母さんはもっと上手に入

れるって事か……。ホントに、あの人は何でも出来るな。

「咲ちゃん、私休憩終わったよ。」

「あつ、はい。」

色々考えながらお茶を飲んでたら、いつの間にか綾休憩終わってるし。さて、じゃあそろそろ教えるか。

「それじゃあ綾さん、始めましょうか。」

「うん。」

「ではまず、この問題集を最初からやってくれませんか？」

「この薄いやつ？ 分かった。」

「では、分からなくなったら何時でも聞いてください。」

「はい。」

返事したら早速問題集に取り掛かった綾。

あれは綾のために買ったやつで、中学の問題の基礎が詰まってる問題集だ。俺も昔やった。あれは問題数は非常に少なく、簡単な問題ばかりなのだが、最低限の基礎はあるから、あれを最初にやるからの方が良いだろう。ちゃんと次の問題集も用意してあるからな。さて、綾が質問してくるまでは自分の問題集をやるか。

あれから30分が経過した。でも未だに一度も質問に來ない綾。どうしたんだ？寝てるのか？それともさっき舞に言われたから、必死に考えてるのか？ちょっと聞いてみるか。

「綾さん、調子はどうですか？」

「んー、もうすぐこの問題集終わるー。」

「そうですか。それは良かったです。それが終わったら次の問題集も有りますから。」

「んー。」

綾にしては珍しいな。いや、綾の中で数学は出来る方なのか？まああれは簡単だから出来て当然だから、次の問題集ではつきりさせるか。

「咲ちゃん、終わった！」

「おめでとうございます。どうでした？」

「全然難しくないね！寧ろ簡単で楽しかった！」

「それは良かったです。では、次はこれをお願いします。さっきよりは難しいですが、さっきの問題集でやったことをしっかり覚

えて、使えば、それも問題なく出来るはずですよ。」

「分かった。頑張ってみる。」

そう意気込んで、綾は次の問題集に取り掛かった。

第11章..暇だ……

綾が次の問題集に取り掛かってから、既に30分は経っている。けど未だに聞いてこない。これはちよつと予想外だ。さっきのを見る限り、何回も聞いてくると予想してたんだけどな……。まあ聞いてこない方が楽で良いんだけどな。

「咲ちゃん、ここ分かんない。」

遂に聞いてきたか。さて、どんな問題なのかなあ。

「ここなんだけど……。」

「えつとですね、これはこちらの式を変換して、こちらに移項したら出来ますよ。」

「おおー！ 流石咲ちゃん！」

「いえいえ。さっき使った公式は、色々と応用がききますから、覚えておくべきですよ。」

「へえ、分かった。」

そして次の問題に取り掛かった綾。さっきの問題は、あの問題集の中でも結構難しい問題だったから、聞いてきたのも分かる。しかし綾、結構出来てるじゃないか。この調子で残りの問題集も終わらしてくれたら楽なんだけどなあ。

聞いて来てから一時間が経った。綾は休憩せずにずっと問題集と向かい合っている。綾が頑張ってる間に、俺は二冊目の問題集が終わった。綾もそろそろ終わるかな？

「咲ちゃん！ 終わったよ。」

「そうですか。 どうでした？」

「ちょっと難しかったけど、分からないことは無かったよ。」

「それは良かったです。 時間的にそろそろお昼にしませんか？」

「あっ、うん。 舞ちゃんはそれで良い？」

「良いわよ。 でも綾、さっきは凄い集中してたわね。」

「うん。 何か簡単だったから、スラスラ解けて楽しかったの。」

「へえ。 咲、一体どうやったの？」

「綾さん用に問題集を持ってきたんです。 どれぐらい出来るか分からなかったので、基礎の基礎から持ってきたんです。 それで、一番簡単なのをやらせてみましたら、直ぐに終わらしてきたので、そこからどれぐらい出来るか予想して、それにあった問題集を渡し

てやってもらってたんです。しかも、その問題集も出来るだけ薄くて、内容が詰まってるのを持ってきたんです。」

「なるほどね。問題が簡単に解けると気分的には嬉しいし、問題集が薄ければ、やる前からやる気が無くなることも無いってことね。」

「まあそんな感じですよ。それよりお昼はどうするんですか？」

ここで食べれるなら食べてみたいなあ。きっと美味しいだろうし、お金も使わずに済むし。

「一応ここで食べるつもりよ。何にするかは綾しか知らないけど。」

「既に私がシェフに頼んでるから大丈夫。今から連絡して作って貰うね。」

「お願いね。」

「お願いします。」

「はい。」

返事をしたら、直ぐに綾は携帯を取り出して電話をかけた。同じ家にいる人相手に一々電話しないといけないのか……。もういい加減驚く気力も無くなってきたぞ。でもホント、こういうのを見ると、やっぱりこの二人はお嬢様何だなくってのを改めて実感させられるな。

「あと15分もしたら出来上がるらしいから、食堂に向かおう。」

「それはいいけど後15分って早いわね……。」

「なんか向こうが、私達がそろそろ終わるんじゃないかと思って、少し前から用意を始めてたみたい。」

「なんだか予知能力みたいだな……。まあこんな家だ、色んな人がいたって可笑しくはない。だから気にしないことにしよう。じゃないとやっていけない……。」

「ふうん。じゃあ早く行きましょ。」

「うん。」

「はい。」

部屋から食堂に向けて歩き出してからそろそろ15分が経つ。しかしまだ歩いていた。一体どこにあるんだ……？

「綾さん、まだ着かないのですか？」

「もうすぐだよ。 あっ、あの扉が食堂だよ。」

ようやく着いたか。なんでこんなにも無駄に広い家に住んでるんだ？ どう考えてもこの時間は無駄な上に疲れるだろ……。これがたまにならいいさ。でもこれを毎日だろ？ 俺なら速攻で家出しそうだし…。

「綾さんは毎日こんな苦勞を？」

「うん。 家って無駄に広いからね。」

一応自覚はしてるんだな。これで自覚してなかったらどうしようかと思っただぜ。あれ？ 綾でこれならもしかして舞も……？

「何よ咲。 言っておくけど、私の家はもっと小さいわよ。 この辺りでは一番小さいぐらいよ。」

「そ、そうですか。」

まああの話を聞いた後に舞のことは見てたら誰でも気づくわな。でも舞までもがこんな家じゃなくて良かった。もしそうなら行くのを躊躇してしまう。

「さっ、着いたよ。 もう準備も出来てる筈だから入って。」

「はい。」

今度は綾に促されながら食堂に入った。……まあ予測はしてたけど、ここも無駄に広いな。だがもう驚かないぞ。と言うか驚くのに疲れた。それで、綾が頼んだと言う料理は何なんだ？ また予想もつ

かないやつか？

「パスタ、ですか。」

「うん。パスタ嫌いだった？」

「い、いえ、好きですよ。」

「そう？　なら良かった。」

これはある意味予想外だったな。絶対普段はお目にできないような料理が出てくると思ってたのに。まあ個人的には、そんな食べたことも無いよく分からん料理よりも、パスタみたいな料理の方が好きだから、これで満足なんだけどな。

「じゃあ早く座って食べよう。舞ちゃんは何時もの場所だから。」

「分かったわ。」

何時もの場所？　ってことはよくここで食べてるって事か。ホント、この二人は仲が良いなあ。俺にはここまで親しい奴は一人もいないのに……。まあいつか出来るか。

「咲ちゃんはここ。」

綾が指してる場所は綾の隣の席である。舞は綾の向かい側に座っている。しかしここのテーブル、むちゃくちゃ長い上にイスがズラズラと並んでるけど、一度にこんなにも人数で食えることなんてあるのか？　まあ俺が分かる訳無いか。兎に角食べるか。

「では、頂きますね。」

「頂くわね。」

「どうぞ。」

俺が言うのを合図に、皆で一斉に食べ始めた。さて、どれぐらい美味しいかなあ。……んー、美味しいんだけど、なんだろう、何故か母さんの方が美味しく感じる。

「どう？　美味しい？」

「はい。　とても美味しいですよ。」

「いつも通り美味しいわね。」

「良かったあ。　これで口に合わなかったらどうしようかと思ったよ。」

これで口に合わない人は殆どいないだろ。いても味覚が可笑しい奴ぐらいだろ。

俺はそう感じるぐらい、これは美味しいと思うぞ。

まあ俺の母さんの方が美味しく感じるのは、味付けの問題だろうな。この料理の味付けは、色んな人皆に美味しいと感じて貰う為の味付けで、母さんのは俺や母さんにだけ合わせてるから、母さんの方が美味しく感じるんだろうな。でもそう考えると、母さんの料理はかなり凄いことになるよな……？　まあ今更驚きはしないけどさ。それから三人で談笑しながら食事して、全員が食べ終えたらまたあの部屋に向けて歩き出した。

あの長い道のりを歩き終え、また皆勉強を始めた。綾には、今度は舞が付いている。だから俺は今、問題集をやってるのだが一つ問題が出た。それはやる問題集が無くなったと言うことだ。俺は普段、家ではそんなに勉強をするわけじゃないが、する時はいつも大学の問題をやっているから、今更こんな問題をやっても簡単すぎてすぐ終わってしまう。俺の予想では、綾の世話にかなりの時間が掛かって、自分のは全然終わらないと思ってたんだ。だけどやりだしてみたら予想外な事に、綾は全然聞いてこない。お陰で俺の方が凄い勢いで進んで、速攻で終わってしまった。ホントにどうしよう……。……そうだ。舞の持つてる問題集をやらして貰おう。舞も俺と似たようなペースだったから、もう何冊か終わってても可笑しくないしな。そうと決まれば早速聞か。

「舞さん。」

「ん？ なに咲？」

「舞さんの終わった問題集貸してくれませんか？」

「いいけどどうして？」

「自分で持ってきたのが全て終わってしまっ、やることが無くな

ったんです。ですから、問題集が何冊か終わってそうな舞さんに頼んだんです。」

「なるほどね。でもそれ難しいわよ。大丈夫なの？」

「大丈夫です。調べる用意はちゃんと持ってきてますので。」

実際はこんな物に頼らなくても解けるけどな。でも周りには隠してるんだから、使わないといけないんだよね。」

「そう、なら心配無いわね。はい。」

「ありがとうございます。」

よし、これで新たにやることが出来たな。さあ、舞はどんな問題をやったのかな。……これはたぶん3年でやる問題だな。舞はこれをスラスラ解いてたって事は、舞もかなり頭が良いんだな。綾とは大違いだな……。まあこれなら舞に関しては何も問題は無い。よし、やるとしますか！

舞の問題集をやりだしてから、2時間が経った。

あれからずっと舞が教えてるみたいだから、俺の出番が無い。

……俺来る必要あったのか？俺ここに来てやったことって、自分

の問題集を仕上げることに。

しかも古いやつ。

次に綾に問題集を渡して、一・二問教えること。

後は舞から問題集を借りてやっていること。

これぐらい何ですけれど……。綾とは少ししか関わってないし、舞から借りた問題集も、普通なら難しいだろうけど俺にとっては何も問題は無い。そして舞から借りた問題集も、もうすぐ終わる……。どうしよう……。これじゃあまた振り出しだ。……。とりあえず休憩するか。二人はどうするか聞いてみるか。

「舞さん、綾さん。私今から休憩で油茶を入れるのですが、二人とも要りますか？」

「んー、どうする舞ちゃん？」

「そうね……。結構進んだから、一度ここで休憩を挟みましょうか。」

「やった！　じゃあ咲ちゃん、私も頂戴。」

「私も貰うわ。」

「分かりました。では、少し待ってくださいね。」

「はい。」

「ええ。」

二人ともこれを気に休憩するみたいだ。じゃあさっさと準備して、二人でゆっくりするか。

第12章..危険な休憩時間

今俺はお茶の準備をしている。準備と言っても作業は簡単だけど…
…。それよりも気になるのが二人の視線だ。何故かコッチをずっと
見ている……。何か俺可笑しいことしたか？もしかして男だとバレ
たか！？って、お茶を入れてるだけでバレたら既にバレてるか……。
じゃあ何でさっきから見てるんだ？気になって仕方ないぞ……。

「あの、なんでこちらをずっと見ているのですか？」

「え？ 別に意味なんて無いよ。」

「ええ。だから気にせず続けて良いわよ。」

「は、はあ。」

気にせずって言われてもなあ……。ずっと視線を感じるから気にな
って仕方ないぞ。

「あの、お二人の視線が気になるので、出来れば止めて欲しいので
すが……。」

「そうなの？ なら出来るだけ見ないようにするね。」

「分かったわ。」

二人に言ったら視線が無くなった。よし、これで心置きなくお茶が
入れられるぞ！さて続きを……。うっ！ま、また視線を感じる……。
これはもう放置するしか無いか……。バレないように気を付けない

とな……。それから俺は、二人の視線に怯えながらお茶の用意をした。

「どうぞ。」

「ありがとう。」

「ありがとう。」

二人にお茶を入れてあげ、自分の分も入れて座った。ふう、ようやく落ち着ける。入れてる間ずっと二人が見てたから、バレるんじゃないかとずっとヒヤヒヤしてたぜ……。でも無事にお茶を入れることに成功した。なんでお茶入れるだけでこんなに緊張しなきゃならないんだ……。

「このお茶美味しい。」

「ほんとね。」

「そうですか？ お口に会って嬉しいです。」

でも美味しいと言って貰うのは予想外だった。

この二人は金持ちだから、すげえ美味しいお茶を飲むのが普通になって、俺のような素人が入れるお茶じゃ不味すぎで飲めないかとも思ったぐらいだし。まあこの二人は優しいから、人が飲むような味

じゃない飲み物が出ない限りは、飲んでくれるだろうけどな。もしかして俺が入れたお茶は美味しいのか！？……いや、たぶんお世辞だろうな。それかお茶っ葉が美味しいだけか。まあ普通に考えて両方だよなあ。

「あれ、咲ちゃんどうしたの？ あつ、さては私達がお世辞で美味しいと言ったと思ってるんでしょう。」

うつ、綾のくせに鋭い……。

「今、何か失礼なこと考えたでしょ。」

「い、いえ、そんなことはありませんよ？」

「なんで疑問系……。 まあ良いけど。 兎に角、私達はお世辞で美味しいって言った訳じゃ無いから、安心していいよ。」

「そ、そうなのですか？」

「ええ。 このお茶はお世辞で無く美味しいわ。」

「なんで態々舞ちゃんに聞くかな……。 そんなに私の言うことが信用ならない？」

まあそこはあれだ。 綾よりも舞の方が信用性があると言うか。 普段の生活を見てると、何となく舞に確認を取りたくなるんだよなあ。

「そんなことは別にいいじゃない。 普段の生活を見てたら綾より私の方が信用性があるのは分かるんだから。」

「ま、舞ちゃん酷い……。」

なんか綾がショックでいじけてるけど無視するか。一々相手にするのも面倒だ。

「ところで舞さん、綾さんの調子はどうですか？」

「綾なら頑張ってるわよ。英語を咲がやってたようにやらせてみたら、最初に比べたらかなり順調に進んでるわよ。聞いてくることも減ったし。」

「そうですか。それは良かったです。」

問題なく進んでくれて良かった。最初のペースじゃあ二日掛かって、目標までたどり着けそうに無かったから……。でもこの調子で行けば明日は集まらなくてもいいかな。

「では、そろそろ私は休憩を終わりますね。」

「そうね、私も終わりにするわ。」

俺が終わるのに続いて、舞も終わりにするみたいだ。

「ちょ、ちょっと待って！ 私まだお茶全部飲んでない！」

「綾がずっといじけてるからでしょ。」

「だ、だって誰も相手にしてくれ無かったから余計に悲しくなってる……。」

「はああ。分かったから早く飲みなさい。一人で休憩を続けるなら急がなくても良いわよ。」

「わ、私も終わりにするよ!」

そう言って急いでお茶を飲んで、片付けを始める綾。その頃俺と舞は既に片付けを終え、勉強を始めていた。そして少し遅れて綾も始めた。

さて、いきなり大きな問題にぶち当たってしまったな。俺は休憩を始める前にやってた、舞から借りた問題集は既に終わりがけ何だよな……。後数ページしかないから、10分もあれば終わってしまう……。やばいな。これが終わると本気でやる事が無くなってしまふ……。何か無いか。何か。

「あれ、咲どうしたの? 何か分からない問題でもあるの?」

「あつ、いえ、そうではありませんよ。ただ舞さんから借りた問題集もう終わりそうなので、これから何をしようかなと……。」

「え!?! あれもう終わったの!?!」

「はい。どうかしましたか?」

何か可笑しいことをしたか？ 舞でもこれぐらい楽勝だろ。

「いや、私でもそれを終わらすには5、6時間は掛かるのに……。
咲って実は凄く頭が良いとか？」

「い、いえ、そんなことはありませんよ？」

ま、マジでか……。これは読み違えたな……。でも舞がこれ終わらすのに5、6時間ぐらい掛かるとすると、今までの成績から考えてみると……ふむ、まあ舞の実力もだいたい分かったな。綾と比べてみると天と地ほどの差があるな……。って、そんなことは今は良いとして。兎に角この状況を何とかせねば……。

「た、たまたま、です。 たまたま、私の得意なところばかり出たので、早く終わったんです。」

「ふうん。 まあそうゆうことにしとくわ。」

「ほ、ほんとですってばあ。」

ふう。とりあえず危機は去ったか。舞にめっちゃ怪しまれたけど……。

「それで、やる事が無いんだって？」

「あつ、はい。 それでさっき悩んでたんです。」

「そうねえ。 私もあれ以外問題集は持ってきてきてないし、綾の家に問題集が有るわけ無いし……。」

これは本気でやばいな……。このまま何もせずに居るぐらいなら帰った方がましだぞ。でも舞一人に綾を任せるわけにもいかないし……。ああ、どうしよう……。

「なら咲、綾に付きっきりで勉強を教えてあげて。」

「付きっきりで、ですか。」

「ええ。それで可笑しな解き方をしているとところがあつたら指摘してあげて。」

それは丁度いい暇つぶしになるな。しかも綾にはプラスになるし。正に一石二鳥だな。

「分かりました。早速綾さんの所に行ってきます。」

「任せたわ。」

「綾さん、調子はどうですか？」

「あっ、咲ちゃん。うん、問題ないよ。」

「そうですか。分からないことが有りましたら聞いてくださいね。」

「うん。でもなんでこっちに来たの？ 態々それだけを言うために？」

理由か……。まあこれは別に誤魔化す必要ないかな……。？

「少し時間が出来たので、暫く綾さんに付きっきりで勉強を教えようかと。」

「ようは暇になったってことね。」

「はい。」

「ふうん。咲ちゃんって偉いなく。もう自分の分は終わったなんて。私なんかまだ半分なのに……。」

半分か。結構進んでるな。ん？その前に綾は自分の問題集なんかあったのか？

「いえ、ただ自分のは簡単だっただけです。それより綾さん。綾さんは自分の問題集を用意してのですか？」

「一応、ね。」

「そうだったんですか。問題集を増やしてしまってすみませんでした……。」

「いいよ別に。咲ちゃんから貰った問題集をやった後に自分のを

やったら、スラスラと解けたから逆に感謝してるよ。 ありがとう。」

「そう言って下さるとありがたいです。」

綾の重荷になってなくてよかった。綾は勉強嫌いだから、問題集が増えたら逆にやらなくなると思ったけど、どうやら問題無かったみたいだ。

「さて、もうひと頑張りしますか！」

「頑張ってください。 私も間違いが無いか見てますから。」

「咲ちゃんありがとう。」

それから俺は綾が問題を解いて、可笑しな所があれば指摘していくという形で時間は過ぎていった。

第13章：母さんこええ……（前書き）

今年ももうすぐ終わりですね。
皆さんよい年を！

第13章：母さんこええ……

「ふう、そろそろ終わりにしましょうか。」

「そうですね。」

「やったー！」

あれから俺はずっと綾に付きっきりで勉強を見ていた。所々ミスや、損な解き方をしているところがあったから退屈せずには済んだ。でも今日は疲れた……。教えるのは予想以上に疲れるな……。

「綾は随分嬉しそうね。そんなに苦だった？」

「ううん、何時も解けない問題がスラスラ解けて嬉しかったけど、それでも勉強は嫌いだから終わった方がもっと嬉しいの！」

「楽しく勉強出来たのでしたら十分ですよ。」

「そうね、今日はかなり進んだからね。」

「私だってやれば出来るんだから！」

「なら今までもこれぐらいやりなさいよ……。」

「そ、それはまあ、あれよ。き、気が乗らなかったのよ。」

「そう……。」「

舞は何かを諦めたみたいだ。でも今日の綾はなかなか頑張ったと思う。舞の話によると、今まではいくらやってもノルマの半分も終わらなかったらしい。でも今回はノルマ以上にやっていた。これは舞も予想外だったらしい。俺もだが。兎に角今日一日でここまで出来たってことは明日は無しかな？ちょっと聞いてみるか。

「舞さん、明日はどうしますか？」

「そうね……。今日一日で大分進んだから、明日態々集まってもやる必要はないと思うけど。」

「私もです。明日は個人で自習をすれば良いと思います。」

「えっ！ 自習!？」

何をそんなに驚いている。

「はい。綾さんなら大丈夫ですよね？」

「ま、任せてよ！」

「どうせしないだろうから、明日は私だけで面倒見るわ。」

「分かりました。綾さんをお願いしますね。」

「任せて。」

「二人とも全然信用してない……。」「

当たり前だろ。兎に角これで明日は暇になった訳だ。家でゴロゴロ

しながら勉強でもするか。でも久々に女装をしないで済むから、出掛けるのもありだな……。まあ明日の事は明日考えるか。

「それでは今日はもう帰りますね。時間的にも良い時間ですので。」

「あっ、うん。今日はありがとね。」

「ほんとね。私一人だったら綾にここまで勉強させることは出来なかったわ。本当にありがとう。」

「そこまで感謝されますと、頑張った甲斐があります。」

こんなに感謝されるとは思わなかったな。ちょっと勉強を手伝っただけなのに……。

「それじゃあ玄関まで送るね。」

「お願いします。」

そうだった……。この家は部屋から玄関まで長々と歩かなければならないんだった……。だる……。

「綾さん、舞さん、ここまでで良いです。」

「ほんとに玄関までで良いの？ 自分で玄関までって言ったけど、なんならバス停まで送ってくよ？」

「大丈夫です。道は覚えてますから。」

「そう？ なら良いんだけど……。」

「何かあったら連絡しなさいよ。 って、そう言えば私咲の携帯の番号知らないわね……。」

「あつ、私も知らない。 ねえ咲ちゃん、携帯持ってるなら番号交換しない？」

「……え、あ、す、すみません。 私は携帯を持っていませんので……。」

ほんととは持ってるけど、交換したら本名バレるだろ！ 本名バレる男とバレる。 こうなるんだからするわけない。 二人には悪いけどこれは出来ないな……。」

「そっか……。 じゃあ仕方ないね。」

「なら私達の携帯の番号だけでも教えとこうか？」

「いえ、そこまでしてもらわなくても大丈夫です。 お二人に迷惑はかけたくないので。」

「別に気にする必要は無いのに……。」

「そうよ。遠慮なんかしなくても良いのよ。」

二人の好意はとっても有り難いけど、ほんとにこれ以上は迷惑をかけたくない。朝に盛大な迷惑をかけてしまったからな……。もしここで電話番号を教えて貰うと、帰るときについ頼ってしまつて、また迷惑をかけてしまうからここは知らない方が良い。

「いえ、ほんとに大丈夫ですから。それでも私は記憶力は良いので、道は覚えてます。だから大丈夫ですよ。」

「そこまで言うなら信じるけど……。なんだか私達の番号は知りたく無いみたいに感じるわね。」

「いえ！ 決してそのような事はありませんから！」

確かにそんな風に聞こえなくも無いけどさ。でもな、俺はどちらかと言うと知りたいんだよ！俺は見た目はアレだが心は男なんだぞ！二人とも可愛いから番号ぐらい聞きたくなるさ……。

「ふふっ、冗談よ。でもそんなにムキになってくれると嬉しいわね。」

「そうだね。今までそんな人いなかったからなんか嬉しいね。」

うっ、何気ない言葉でここまで嬉しがれると逆に恥ずかしいな……。これは逃げるが勝ちだ！何に勝つのか知らないけど！

「で、では、お二人ともそう言うことでさよならです！」

「あつ、うん、ばいばい。」

「じゃあね。」

二人にさよならして、俺は走って家を出た。

俺は今バス停にいる。

二人にも言ったけど、俺は記憶力が良い。

だから大抵の道は一回通ったら覚える。

だから帰りは難なく辿り着いた。

しかしここで問題が発生。

バスが来るのが一時間に一本しかない。

利用者が少ない上に前の停車場からここまでは長いから、来るバスが一時間に一本しか無いのだろうな。

そして運の悪いことにハズは10分前に行ったみたいだ。

つまりあと50分は来ない。

そうなると待ってる時間が無茶苦茶暇だ……。遊べるような物は無ければ、俺が普段使う問題集もない。さてどうしようか。……。寝るか。バス停にはイスもあるみたいだから、そこに座って寝て時間が来るのを待つか。携帯とか持ってきて無いから、時間になったら起きる方法が自力しか無いけど、その辺は気にしないでおくか。兎に角今は寝るか。

「ん…………。」

ここは…………バス停？あつ、そういやバスが来るのを待つためにここで寝たんだったな。今の時間はと…………よし、バスが来る五分前だ。なんだか一時間以上寝てるような気がするが気のせいだ。バスが来るのが毎時丁度で、俺は5時10分ぐらいに寝て、今は6時55分になってるけど気のせいだ。気のせいと言うことにしよう。それより母さんに連絡してないのが心配だ……。帰ったときに何も言われなきゃ良いけど……。あつ、バスが来た。さて、さっさと乗って帰るか。

現在の時間8時20分。場所は家の玄関前。俺は今入りたくても入れない状況にある。何故かと言うと、それは家の雰囲気だ。なんか怒りの感情が駄々漏れしてるんですけど……。は、入りずれえええ。でもこんなところでいつまでもじっとしてて、不審者に間違えられて

も厄介だし早いところ入るか。物凄く入りたくないけど……。

「た、只今〜。」

「お帰り翔。」

し、翔……。母さんが俺を呼び捨てにするときは大抵機嫌が悪いときだ。これは覚悟しなければならぬみたいだな……。

「なんで連絡もしないでこんなに遅いのかな？」

笑顔のまま言われると逆にこええよ！

「え、えと、連絡しようが無かったと言いますか……。」

「なんで出来なかったの？」

だから笑顔のまま言うなって！めっちゃくちゃ怖いから！

「け、携帯をお、置いてきていたから……。」

「なら向こうの家で電話を借りるとか、公衆電話を使うとかいくらでもやりようはあったと思うのだけれど？」

「む、向こうの家を出た時は、あ、あまり遅くなかったから必要な、ないかと思って……。」

ダメだ。スムーズに喋れない……。母さん怖すぎる……。

「ならなんでこんなに遅くなったのかな？」

「バ、バス停でか、仮眠をとってたら、い、いつの間にか時間が…。」

「ふん。」

その後母さんずっと俺を無言のまま見ている。ちなみに俺はずっと下を向いてる。怖くて母さんが見えない。母さん、気まずいから何か言ってくれ……。

「はあ。まあ翔ちゃんも反省してるみたいだし、今回はこの辺で許しますか。」

「あ、ありがとう母さん。」

た、助かったああ。

「でもなんで携帯を置いていったの？ 翔ちゃんが忘れるわけ無いから、何か理由があったんでしょう？」

「ああ。もし携帯があのだ二人にバレて、アドレスを交換とかになったら本名がバレてしまうから、その危険性を無くすために置いて行ったんだよ。」

お陰で最後にひどい目にあったけどな。

「なるほど。」

母さんもこれで納得してくれたみたいだ。さっきのヤバイ雰囲気もいつの間にか無くなっている。もう何時もの母さんだ。

「あつ、翔ちゃん夜ご飯食べた？」

「いや、まだだけど。」

「なら一緒に食べましょ。もう準備は出来てるから。」

「え？ 二人分？」

「ええ。翔ちゃんの事だから、長くは居たくないだろうから早く帰って来ると予想して、二人分作ってたのよ。」

流石母さん、俺の事をよく理解しているな。

「でももし俺が向こうで誘われて、流れで食べてしまった時はどうするつもりだった？」

「翔ちゃんの分は残しといて、帰ってきたら頑張って食べて貰うつもりだったわよ。」

「おい！」

そんな無茶をさせようとか考えてたのかよ……。食べずに帰って良かった。それから向こうの家よりも美味しい母さんの飯を食べて、なぜ母さんはこんなに料理が上手なのかと疑問に思いながら食べ終えた。

第14章..テスト開始！（前書き）

少し遅いですが、新年あげましておめでとうございます。

これからも文章力のない作者の小説『人生』を読んでもいただけると嬉しいです。

第14章..テスト開始!

今日は久々(?)の何も無い日だ。最近は毎日が精神をすり減らす毎日で、まるで休めてなかったからな。今日は一日ゆっくりしてよ
うかなあ。

さて困った。

ゆっくりしてようかと思ったが、凄い暇だ……。

今の時間は昼過ぎで母さんも何処かえ出掛けてしまった。カナとコ
ナも二人仲良くどっかに出掛けたから、家には俺一人だ。今から寝
るのは流石に早いし、かと言ってボーッとするだけってのは時間が
勿体無い気がするし、でも出掛けるのは億劫だし……。………勉強
でもしてるか。こんなときにやるのが勉強しか思い付かない自分
が恨めしい……。

ふう。とりあえず一段落着いたか。今の時間は……5時か。それなりに勉強したな。でもこの時間になっても家には誰も居ないのか……。カナとコナすらいはないとか……。時間的に少し寝たら良い時間になるかな。寝るか勉強するかし時間潰し方が無い俺って……。普通さ、俺ぐらいの歳なら彼女の一人や二人はいたりするじゃん？二股はいけないけど。それか仲の良い友達とゲーセンとかボーリングとかカラオケとかに行くとかさ、色々あるじゃん？なのに俺は寝るか勉強って……。……考えたら余計に悲しくなってきた。さっさと寝よ……。

「――」。――。

……ん？なんか声が聞こえるな。誰かいるのか？

「ふう。」

「母さん？」

声は母さんだった。電話の前にいるから今まで電話をしていたようだ。

「あら、翔ちゃん起きたのね。」

「ああ。さっき電話してたのか。」

「まあ、ね。」

ん？母さんにしてはちょっと歯切れが悪いな。何かあったのか？

「どうかしたのか？」

「ちょっと母さんの仕事関係で問題が起きちゃってね……。」

母さんの仕事……。俺の全く知らないことだ。母さんは何も言わないし、別に俺も興味は無かったから聞かなかったけどこの機会に聞いてみるか。

「母さんってどんな仕事をしてるの？」

「私の仕事？ 大学の先生よ。」

大学の先生？ 案外普通だな……。……さて、ならあの身体能力やその他の凄いスキルは一体何なんだ。どう考えても大学の先生やって身に付くことじゃないぞ。

「あつ、翔ちゃん疑ってるな？」

「そりゃ疑うわ。母さんって身体能力かなり高い上に、家事全般はかなりレベル高いだろ。料理なんか綾の家のシェフより上手かったぞ。」

「あらそんなに？ ありがとう。でも本当よ。他に何か変な仕事やってる訳でも無いわよ。身体能力に関しては家の事情でやむ

無しに身に付いたけど、家事全般は全部趣味よ。」

家の事情か……。その辺は追々聞いていくとして、家事全般は趣味なのか……。趣味だけでプロ（たぶん）のシェフを越えるなんて……。母さんかなりの才能があったんだろうなあ。

「分かった。色々突っ込みたい所はあるが今は良い。それより問題って何？」

「あのね、どうも大学の生徒がある問題を起こしちゃったらしいのよ。」

大学の生徒の問題？大学って基本的に生徒には関わらないんじゃない？……？

「翔ちゃんが思ってる通り、大学は基本的に生徒には深く関わらない。けど今回はちょっとやり過ぎた子がいるのよ……。」

「やり過ぎた？」

一体何をやらかしたんだ？

「まあこれ以上は仕事上言えないけど、この事をこのままにしておくと大学の評判が悪くなりそうなのよ。それで何とかしようって事で私にも電話が来たの。」

なるほど。なにがあったか詳しくは分からないが兎に角面倒な事になったんだな。

「大体分かった。それで母さんはどうするつもりなんだ？」

「まだ何も考えて無いわ。翔ちゃんは何か思い付く？」

「詳しい事が分からないから何とも言えないが、そいつを退学にするとか？」

まあ流石にそれは可哀想かなとは思うけどな。

「やっぱりそう考えちゃうか……。」

やっぱりって事は他の誰かも俺と同じことを言ってたのか。大方面倒事をさっさと片付けたい先生だろうけどな。

「やったことによるけど、大学側が問題視するぐらいの事だから結構大事ではあるだろうし、それをしたって事は罰を受ける覚悟があつてやったのか、問題視はされないだろうと考えてやったのか、バレないと思ってやったのか、ただの好奇心か、この辺りの考えになると思うから退学でもしうがないかなと。」

「そうよねえ……。翔ちゃんの言ってることも考えながら何とかするしか無いわね。」

「俺なんかも力になれることがあつたらするよ。」

「ありがと。翔ちゃんが仲間になってくれたら千人力ね！」

俺どんだけ凄いだよ……。まあ母さんにはいつも世話になってるから全力を尽くすけどな。

「まあ出来る範囲内で全力を出すさ。」

「分かったわ。よし、翔ちゃんの力も得ることが出来るようになったし、晩御飯でも作りましようか。」

「頼んだ。」

それから母さんは晩飯を作り出したから、俺はいつの間にか帰ってきてたカナとコナと遊ぶことにした。こいつら最近俺達と暮らしに慣れたせいか、名前を付けてくれた方のベッドによく潜り込むようになってきた。俺も母さんも別に問題は無いからそのままにしてるけどな。

「翔ちゃん、お皿運んで。」

そんなことを考えながら遊んでたら母さんから用意を頼まれたので、手伝いをしてたら晩飯が出来上がった。

「いただきます。」

「召し上がれ。」

……うん、やっぱり母さんの料理は彼処の家の料理より美味しいな。これを趣味の範囲で出来るようになったんだから母さんの才能は凄いな……。改めて思い知らされたよ。飯を食べた後はいつもと変わらず過ごして、寝る前に一応勉強をすることにした。……あれ？テストの教科って、何だっけ……？……まあいつか。別にどの教科でも問題は無いしな。でも分からないと今勉強できないな……。……仕方ない、寝るか。

「おはよう。」

「おはよう。」

「おはようございます。昨日はお二人ともどうでしたか？」

学校で挨拶を交わしてから直ぐに気になってたことを聞いた。綾の事だから殆どやってないんだろうなあ……。

「それが意外や意外、綾が真面目に勉強してたのよ。」

「……………本当ですか？」

あの綾が、真面目に、勉強？あいつ頭可笑しくなったか？

「ちょっと！なんでそんなに驚くのよ！」

「だって、ねえ。」

「はい。あの、綾さん、熱でもあるのでは…………？」

「熱もないし頭も可笑しくなって無いから！お願いだから心配そうな顔してオデコに手を置かないで！すごい悲しくなるから！」

どうやら本当に熱は無いみたいだな。なら綾は普通の状態ですら勉強を……。今日は何かが起こるな。絶対。

「舞さん、気をつけましょう。」

「ええ、そうですね。」

「二人とも酷すぎる……。」

そう言い残して綾は自分の席について顔を伏せてしまった。まあ関わるのも面倒だから放置するか。

「でもほんと、昨日綾かなり頑張ってたから今回のテストは大丈夫そうよ。」

「そうなんですか。舞さんの予想ではどれぐらい取れそうですか？」

舞の意見を参考に今回のテストの点数を決めなければ。俺だけ下のクラスになるのはまあ良いとして、俺だけ上のクラスってのだけは勘弁して欲しいからな。

「そうですね……60〜70ってところかしら？ 問題を見てないから詳しくは分からないけど。」

「いえ、それだけでも十分です。今日のテスト、お互い頑張りますよ。」

「そうですね。あつ、先生が来たみたいよ。」

そう言われて前を見たら丁度先生がテストらしきプリントを持って入ってきた。あっ、舞に教科聞くの忘れてたや。まあ今更聞いたら無駄な心配をされるだけだから、聞かなくて正解か。さて、テスト頑張りますか！

「それでは、最後尾の人に答案用紙を回収してもらいます。今から何かを書いていると不正行為と間違えられますので、何も書かないで下さい。」

よし、ちゃんと綾の予想点数を計算して問題を解いたぞ！これで大丈夫なはずだ。

「……………はい、全部ありますね。では、今日はこれで終わりです。皆さんさようなら。」

先生が挨拶をして出て行ったら、クラスはテストの話で一杯になった。これは男でも女でも変わらないな。さて、綾の調子はどうだったか聞いてみるか。

「綾さん、テストどうでしたか？」

「うん！ バッチリ！ 咲ちゃんは？」

「私もそれなりに出来たはずですよ。」

「そっか。 舞ちゃんは問題ないからいつか。」

「私だけそんな扱いは酷いわね。」

「うわっ！ 舞ちゃん！？ い、いつからそこに？」

「ついさっきよ。 それで、綾は大丈夫なんですよ？」

「うん、今回は自信あるよ！」

「そう。 少し心配だけど大丈夫でしょう。 これからどうする？」

「んー、テスト終わったし何処かで遊ぶのも良いわね。 咲ちゃんは？」

「遊びか……。 どうも今日は気が乗らないな……。」

「すみませんが今日は遠慮します。 テスト疲れしましたので、家で休憩しようかと……。 すいません……。 」

「そっかぁ……。 なら二人で行く？」

「綾が良いなら良いわよ。」

「じゃあ決まりだね！ それじゃあ咲ちゃん、私達行くね。」

「分かりました。」

「じゃあね。」

「またね。」

「お二人ともさようなら。」

遊びに誘ってくれたのに断るのは気が引けるが、やる気がないのについて行っても邪魔になるだけだしな。俺はさっさと帰るか。そして俺は教室を後にした。

第15章..まさかの大ピンチ!?(前書き)

ここ二週間ほどテスト関係で更新してる余裕がありませんでした。
すいません……。

第15章..まさかの大ピンチ!?

「あら、そこにいるのは桐生さん?」

「はい?」

校門まで来て誰かに呼ばれた。誰だ?俺を呼ぶ人なんてあの二人しかいないはずだ。しかも二人とも何処か遊びに行ってるからいないはずだし……。そう思って振り返って見るとそこにはいないと思っていた筈の人がいた。

「こんにちは桐生さん。」

「こ、こんにちは……。」

そこにはあのドリルじゃないツインテールの神木エレナがいた。しかしあの髪を見るたびにドリルドリルって……。俺どんだけドリルが気になってんだよ……。

「桐生さんもここの生徒だったのね。」

「はい。 神木さんもここの生徒だったんですね。」

「ええ。 私も一年よ。」

「神木さんですか? あれ? 『も』ってなんで私が一年ってわかったんですか?」

俺は分からなかったのに……。これもやっぱりお嬢様特有の能力っ

てやつか？

「そんなの貴女の服を見たら分かるわよ。」

俺の服……。ああ、この最悪の制服か……。ヒラヒラの短いスカートがもう嫌で嫌でたまらない。いつそ破いてしまえと思ったこともあるが、それをする周囲から変態扱いされるから流石にしない。…………女装してるだけで十分変態だな。ああ、どうか誰にもバレずに高校が終わりますように……。

「…………なに貴女は胸の前で手を組んで目を瞑りながら空を見上げてるの？ 何かの祈り…………？」

はっ！？思っていたことをいつの間にか体が実行していた！いくら辛いからと言ってもこんなところをまだ会うのが二回目の神木さんに見られたら変に思われるじゃないか！大丈夫。まだこれが一回目だ。挽回のチャンスはいくらでもある。今は落ち着くんだった俺！

「まあ貴女が変なのは今更ね。それより今帰り？」

…………既に手遅れ、なのか。なんで会うのが二回目の相手に俺は変なのが普通みたいな反応をされなきゃいけないんだ……。俺神木さんに変なところ見せたのこれが初めてだよな…………？というか絶対そうなはずだ！だって見に覚えが無いし！

「ねえ、聞ってる？」

「え？ あ、はい、聞いてます聞いてます。」

「じゃああたしの質問に答えてくれるわよね？」

「はい。今は帰りです。」

何でこんなこと聞くんのだ？もし一緒に帰るとしてもこの人って車じゃないのか……？

「そ、なら一緒に帰りましょう。」

「え、あ、あの。」

「なに？」

「神木さんって車じゃ無いんですか？」

「車よ。」

やっぱり車じゃないか。ならどうやって一緒に帰るんだよ。……まさか一緒に車に乗れとかは言わないよな？まあ会うのが二回目の相手をいきなり車に寄せたりはしないよな。この人も金持ちだし。

「一緒に車に乗って帰るのよ。」

「そ、それは……。」

「何か問題でもあるの？既に一回乗ってるんだから今更遠慮なんかじゃないわよ。それとも貴女車なの？」

「い、いえ、歩きですけど……。」

そう言えば会って早々車に乗せて貰ったな。なら今更俺を乗せるの

に戸惑う必要は無い、と。でも少しは警戒しようよ……。俺男なんだから……。……あ、今は女か。そっか、女だから余計に遠慮なんか無くなる訳だ……。なんか自分は今女装をしてると言うことを再認識させられてしまった……。ああ、もうどうでもいいか……。

「ちょ、ちょっと！　なんで落ち込んでるのよ。あ、あたし何か気にさわること言った……？」

「いえ、神木さんは関係ありませんから。それより車で一緒に帰るのでしたらよろしいですよ。」

「そ、そう？　なら早速車のところに移動するわよ。」

俺を少し変な目で見たあと、直ぐに移動を始めた。ああ、こういう所を何回も見せてるから変な人扱いされるんだ……。そんなことを考えながら神木さんに付いていった。

「着いたわ。さっ、車に乗って。」

そして着いた所には前にも乗った車があった。この車俺には高級すぎて乗るのが戸惑われるが、さっさと乗らないと神木さんに不振な目で見られた上に機嫌を悪くさせてしまうからさっさと乗ることにした。

「まずは桐生の家から行くわね。場所は？」

「え？ 私の家に行くんですか？」

あの家にここの学校の生徒を近づけたく無いんだけどな……。

「当然でしょ。あたしの家の車なんだから、先にあたしの家に行ったら貴女どうするのよ。」

「それは……。」

あのくそ長いバスに乗って帰るしか無いだろうな。家に近づかれるぐらいなら長くて良いからバスで帰るし。

「バスで帰るなんて貴女があたしの車に乗る意味無いじゃない。寧ろ損してるわ。」

「そ、そうですけど……。あ、あまり家に近づけたく無いと言いますか……。」

「別に貴女の家がどんなんでも笑ったりはしないわよ。だから早く場所を教えなさい。」

そんなことは気にしてねえ！笑われて済むなら送って貰うよ！でももし男だとバレたら……。

そりゃ家の前まで送って貰うだけでバレるなんてあるわけ無いんだけどさ、人生何があるか分からないからな……。そしてこういう時は大体はバレるのがお約束だからなあ……。でもこんな理由は言えないし……。なんて言えば家に送って貰うのを阻止できるかなあ……。？……。そうだ、これならいけるんじゃないか？

「あの、送って貰うのは家の近くまでってことにしませんか？」

「なんでよ？」

「やっぱり家を見られるのは恥ずかしいですし、神木さんに迷惑はかけたくないですから。」

「別にあたしは両方とも気にしないわよ。」

「神木さんがそうであっても、私は気になってしまうので……。
ど、どうですか？」

これならいけるだろ。家の近くって言ったらやっぱりいつもあの二人と別れる場所が良いだろう。あそこなら流石にバレることは無いだろう。俺自信も少し意識し過ぎてる気はするけど、万が一って事はあるからな。もしバレたら俺は生きてるか分からないからなあ……。女って生き物はかなり怖い生き物だから。

「…………分かったわ。今回はそれで手を打ちましょう。」

今回は？ってことはまた次があるのか？ならこれからは帰るときは気をつけないとな。もし捕まって、家まで送られるような状況になってバレたらおしまいだからな。

「ありがとうございます。では校門を出て三つ目の曲がり角までお願いします。」

「そこまででいいの？」

「はい。私の家はそこから近いので。」

「分かったわ。じゃあそこまでお願い。」

「かしこまりました。」

場所を聞いたら、神木さんが運転手に頼んで早速動かして貰った。まあ今回は色々あったが、少し帰るのが楽になったと考えるか。

「お嬢様、着きました。」

「もう？ 早いわね。」

「まあすぐ近くですから。」

歩いてもそんなに時間の掛からない場所ながら、車じゃ本当にすぐだった。

「本当にここまででいいの？」

「はい、この前のこともありますし、これ以上は迷惑掛けたくないの……。」

それ以外にも理由はあるし。とにかく神木さんにはここで帰っても

らわないとな。

「そんなの気にしなくて良いのに……。 」

「そう言って下さるだけで嬉しいです。 それでも気にしてしまうので……。 」

「……………分かったわ。 」

よし！ 神木さん諦めてくれたか。 これでバレル心配は無くなったな。

「では私は降りますね。 」

「ええ。 」

「では神木さん、 さようなら。 」

神木さんの返事は無かったけど、 気にせず降りた。 俺が降りたら直ぐに車は何処かに走っていった。 何処かって言っても家だろうけど。

「さあゝて、 帰るとするか。 」

「ええ、 そうね。 」

「……………」

ちょっと待て。 今聞こえないはずの声がしなかったか？ あれはまるで神木さんの……。 いやいやいやそんなはずはない！ だって車はさつき行っただし。 なら幻聴か……。？ それはそれで嫌だけど……。

「ねえ、なんでそんな所で立ったままなの。早く行きましようよ。」

「……………神木さん。」

「なに？」

「……………なんで貴女がここにいますか？」

あれは空耳でも幻聴でもなく、本物の神木さんの声だった。

「車から降りたからよ。」

「何で車から降りてるんですか？」

「そんなの、貴女の家に行くからに決まってるじゃない。」

「……………え？」

今、なんて言った……………？俺の家に…来る…だと……………？

「なにボートとしてるのよ。早く案内しなさい。」

「ち、ちょ、ちょっと待ってください！何で私の家に行くんですか！？」

これはまさかの大ピンチか！？こんなことになるなんて全然予想してなかったぞ！

「そんなの、あたしが貴女の家に行きたいからよ。何か問題でも

ある？」

大有りだ！って叫びたいのをグッと我慢した。

「い、いえ、それは……。」

「ならいいじゃない。さっさと行くわよ。」

そう言って神木さんは俺を促した。これはもう覚悟を決めた方が良
いみたいだな。

「……………はい。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0288f/>

やっつけられないけどやらなきゃならない人生

2010年10月14日22時58分発行